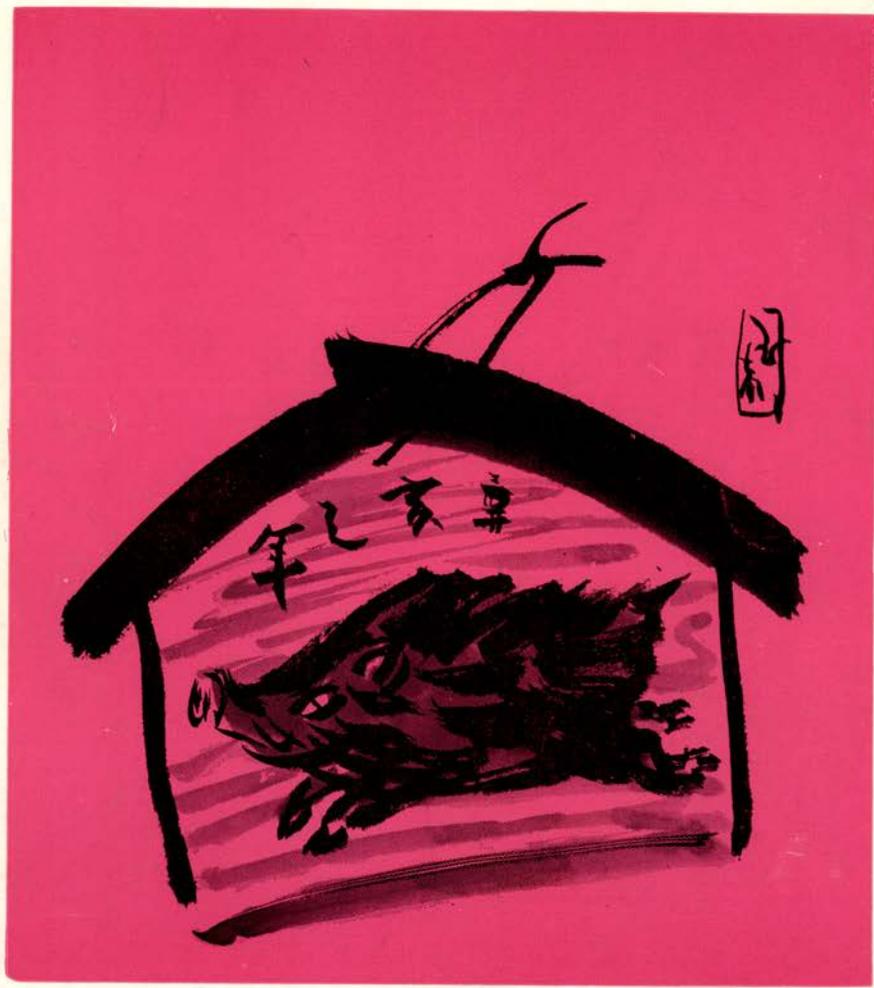


川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十五年十二月二十五日 印刷
昭和四十六年一月一日発行 (毎月一日発行)
創刊大正十三年 通卷五二四号



No. 524

川柳ゆーもあ特集

一月号



えらばれ

みがきぬかれた 灘の酒

超特撰 日本盛



超特撰 (化粧ケース入)
一、ハリットル詰・一、四一〇円

酒 清
日本盛
ニホンサカリ

灘 西宮酒造 醸



国立公園 奥新和歌浦
・雑賀崎

国際観光旅館

うおまた
魚又楼

風光明媚な
海岸美を
誇る

TEL 和歌山 (44) 0431・1186(代)
大阪案内所 (641) 3 5 6 4

絶句した電話にかえって来る絶句

霊柩車合掌の列に影きびし

冬の陽に君の柩のひそかなる

背伸びしてかくしマイクを持つ男

昔はよろしうおしたと除夜の鐘に明け

庵 生々 島 中

年 輪

EXPO'71が明けた昨年の元旦、さあ来たれ一億と85才の石黒会長が大きく呼びかけたのは昨日のようである。その七〇年が更に新しいよき年へと祈る除夜の鐘が静かに一〇八。古いもろもろの事はすべて流れてゆく。泣いた、笑った、怒った、喜んだ、誰かの和歌の下の句「あわれ重なる年の数かな」である。長寿だからと言って喜んでばかりもゆくまい。皆が皆長寿すれば「めでたさ」も薄らいでその上老人に対する社会福祉問題までが切実になって来る。

一年前朝日新聞が集録したアンケートに「そろそろ戦後の行動派が定年となるからそれを基盤とした老人パワーが台頭すると答えた人が相当居た。老人パワーを團結せねばならぬとは寂しい話だ。馬齢ばかり重ねたとて肉体的にも精神的にも老人でない老人でありたい生きがいのある生き方をしたい。しからば生きがいとは？財産でもない地位でもない。取り組む仕事に対する満足感である。大半の時間を川柳に割いて日暮する私達の倅せを新春に当って今一度かみしめようではないか。

川柳塔一月号

川柳塔一月号目次



題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

年輪……………

川柳塔……………(同人作品)

憶猪……………

川傍柳初篇研究……………(九十)

前田喜代人・岡崎重義・清川端柳風・故高須唾三味・丸

博美・藤井和雄
十府・岡田甫

「旅人」以後の麻生路郎作品……………(6)

新春雑感……………

近作柳樽……………

秀句鑑賞……………(同人吟)

九輪抄……………(近作柳樽)

イノシン講釈……………

中島生々庵……………(1)

中島生々庵選……………(4)

戸田古方……………(2)

中島生々庵……………(22)

北川春巢選……………(20)

若本多久志……………(28)

川村好郎……………(29)

菊沢小松園選……………(50)

東野大八……………(26)

憶猪

戸田古方

「家」という字はウ冠に豕(ブタ)、ウ冠は屋根、豕(ブタ)を九〇度左へまわすとブタの象形になる。ブタが人間と相住まいしている中華の農家、猪が飼われてブタ、人間との付合いは相当古いに違いない。中華のブタは牙がないだけで、黒味を帯び、猪のように痩せている。そのためかどうか、中華料理のメニューにはブタと書くところに猪の字をよく使う。

日本では猪突猛進と威勢のいい代表みたいにいわれているが、猪とブタとあまり区別しないように見える中華では、もっと平和な、生産に連なるものと思っているのかもしれない。日本の猪は恐しく見られ、中華のは愛されるブタである。絃楽器の起源が弓だといわれているのにどこか似ている。

今年(庚亥(カノエイ))の歳。十干・十二支は生きもの、殊に植物の一生、芽が出て、葉が茂って、花が開いて、実をみのらせて、その実が次の生命に育つまでを現している。

川柳五十三次 ……(五) ……富士野鞍馬 ……(48)

古川柳のユーモア ……北川春巢 ……(40)

川柳ゆーもあ特集 ……詩はきびし ……高鷲亜鈍 ……(19)

近詠 ……亥年の川柳人 ……遺稿 ……清水白柳 ……(52)

雑感 ……初歩教室 ……神谷凡九郎 ……(49)

大萬川柳「急所」 ……本田恵二朗 ……(58)

川柳家の暦 ……(二月生まれの人) ……遺稿 ……中島生々庵選 ……(60)

柳界展望 ……(蕭風) ……清水白柳 ……(62)

本社十二月句会 ……(庸佑) ……(70)

各地柳壇 ……(文秋) ……(73)

一路集「賽銭」 ……(永尾英断選) ……(56)

編集後記 ……(丸川初甫選) ……(57)

……(大西八步選) ……(57)

……(一三夫・葉子) ……(76)

座右の句

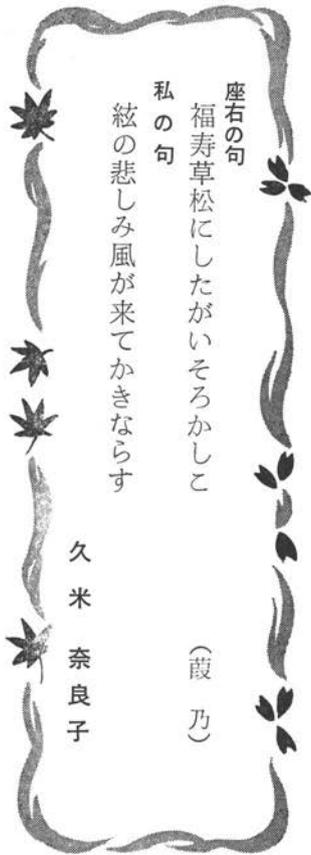
福寿草松にしたがいそろかしこ

私の句

絃の悲しみ風が来てかきならす

(葎乃)

久米 奈良子



農業に生まれ、農業にはぐくまれた民族らしい暦である。いかにも中華にふさわしい。庚はアラタマル、夏の繁茂から結実に変ろうとする状態を表わす文字。亥の音はガイ、トジルという意味を持つ。母体から産み落ちて、来たるべき春の新しい生命の発芽を待つためにしばらく確り蓋を閉じている姿。私は易のことはよく知らないが、今年は新しい生命のいぶく年ではないかと思う。或はもうその芽が動き出しているのかもしれない。

一九七一年。昨年は敗戦から二十五年。立ち直って、伸び上り、経済大国にのし上った日本が、今までの総決算のように、他国からエコノミック・アニマルと批難され、公害によって日本人自らもそれを自覚し始めた年であった。猪突猛進を警め、ブタの兄弟、先祖であった猪を考えよう。テイクよりギブを先にし、世界に愛される日本に踏み出す年でないければならない。尊敬される日本人になろう。川柳もそれに役立ちたい。

本年は「猪」の句もたくさん作られよう。過去を考え、未来を考える人々の心を川柳したい。今年こそ、日本人が「汝自身」をじっと見つめる好機会であろう。

ブタのきょうだい猪は芋を食う
古 方

公害のことなど考えてない儲け
古 方



中島生々庵選

大阪市 山川阿茶

ダイヤになれぬからダイヤで身をかざり

長髪のジーパン姿で畑を打ち

善悪の二つの顔で世を生きる

菊日和留守番同士の長電話

ご破算に願いましたと又離婚

大阪市 橋高薫風

胃手術(五句)

天井が未来へ移行 担送車

麻酔より醒めて必ず夜なりけり

鷺一羽身じろぎもせぬ手術熱

切り除りし肝に秋心を贈るのみ

粥を嘔む乳児嘔むよりおそれをなし

吹田市 岡田某人

つき馴れた嘘が通じぬ十二月

ちび下駄へ暮れの算段まだつかず

暮れの街どう曲っても十二月

餅に海老載せて も一度寝るとする

正月の雑魚寝にうなされてるのが一人

末席です下戸です燗方まかされる

頭なで胸なでコーチャー忙しい

すき腹がどやどや戻る十八時

復讐の鬼が碁盤へいきりたち

美しい人魚にたつぷりしほられる

高槻市 傍島静馬

つつましく小菊は小菊のにおいもつ

お母あさんお上手ですねとみな縫わせ

朝晩の読経も子らに憚かられ

コーヒーを招ばれ名前浮ばぬま別れ

ホステスの思いどおりにカモが来ず

京都府 大鶴喜由

正月の約束もする紅葉狩

まだ早いなどと良縁待っている
悲しさを笑う無情を知りつくし
生活にひびかぬ嘘は聞き流し
富士山がすぐそこに見え何故かうれし

下関市 国弘半休門

お願いが後手々々々々かなえられ
修身を言うから嫁の氣にいらざ
眼薬の涙はこぼさぬよう払らい
考えるたばこはペンを置いて喫い
裏出口それから駅前二つ出来

大阪市 大坂形水

グアム島で真っ黒焼けたハネムーン
ちよっとばかり抜けているから受けが良い
秀才という学歴に躊躇する

白柳さん逝く

旅のどこ歩いているかベレー帽
愚痴聴いてくれる白柳さん居ない

岡山県 浜田久米雄

なにかしゃべっているが要点には触れず
薄っぺらな手紙でなにやかや頼み
年寄りが漢方薬とうまが合い
結論はも一度延ばすことにきめ

白柳氏逝去

突然の電話言葉が声に出ず

青森市 工藤甲吉

せの君にされてひたすら稼がされ
煮つまっても男は気がつかず
酒のあるうちはじっくりおわします
夫婦五十過ぎていよいよ同化する
おしまいはやっぱりうちの孫を立て

大阪市 本多柳志

一度会った事が決意の邪魔になり
親馬鹿を笑う目もよし七五三
笛吹けば踊って見たい下心
順序不同花輪大臣知事やくざ
今日だけの歩行者天国屋台店

大阪市 正本水客

尾道にて

細い海が錫箔のように夕陽すいながら
船の気笛が汽車走る音包みにき
鐘のこだまが山と海とから帰る
めしの看板があり林芙美子の碑
タンタタンタン朝は港のリズム持つ

下関市 桜川不水

秋の陽に足すくわれて木賃宿
酔眼朦朧案山子が踊る奴さん
古いのを出し家計簿は愚痴をいい
タイムングよいライターのねだりよう
ころんだらええに転けない千鳥足

堺市 吉田圭井堂

懸崖をほめたらみんな造花なり

黒髪は交えたが目の色どないしよう

辞められる社員ほんとに羨まし

世に負けて座食する程貯めて居ず

人物があれば四選などされず

倉吉市 奥谷弘朗

堅物もやっぱり美人の肩をもち

女房の憩の一つ婦人会

受話機手に手ごろなうそが見当らず

ことごとし曆持ち出す母達者

エリートをサンプルにして気がつかれ

大阪市 金井文秋

若い気へ老いは静かに忍び寄る

若い気で居たい髪でも染めましょう

髪染めて娘に怪しいぞと云われ

八十路過ぎ残る命を子にあまえ

冬が来て夏の陽焼けをやつと消し

下関市 石川侃流洞

美辞麗句辞書繰り返えし祝辞かく

逃げ腰へ燃えるマダムの目がからみ

スランプの或る日無茶苦茶してみたし

無視された生命と知らずモルモット

害虫も天の恵みに育てられ

今治市 越智一水

正直に言うて口べた誤解され

めだたない化粧で目立ついい女

貧しさへまあ息抜けとケガをする

肩書きはいらない椅子で鉄もふり

あんどしたことが病いの種となり

東大阪市 久米奈良子

夢ひとつ灯りて日記はなやぎぬ

さびしさよ恋のパズルを解き終えて

湯加減を問えば老母に歌があり

床柱秋の愁いの背を支え

香のうせし匂い袋を捨てかねて

大阪市 宮尾あいき

金策が出来て空まで青く見え

咲かな損損キリン草派手に咲く

一人来て吾子の墓標へひとり言

コオロギのねぐらの草と知らず引く

墓の草花の咲くのは引かずおく

京都市 松川杜的

奈良依水園にて

南大門秋に沈めて依水園

静中動こわれた水車を水が打つ

戒壇院(二句)

コスモスが疎々戒壇院へつづく道

観光寺院何処かでサンマの匂いする

歩道橋新設真先に寺がこて

大阪市 室谷鉄舟

俺と娘に当り散らして妻暮れる
一合でごろり馬車馬こと足りる

赤線があつたらと思ふ冷戦中
午前様どなり散らして床に就き
靴の音昔の音でもう鳴らず

藤井寺市 西 いわを

一輪の花にも壺の色具合
お見舞に次ぐ香爨は痛々し

奈良西大寺にて

塔の跡礎石は何を考える
禿頭すっぽり冠る大茶盛

大阪市 西 出一栄

空青く夫に散歩うながされ

月花虫 野仏うれし秋の夜

小春日和木蔭は矢張り秋の風

補聴器へ馴染まぬ難聴もてあまし

出雲市 尼 緑之助

冬の音たてて急変した元氣

配る先のことでもめてる柿の出来

茸狩りの自慢その手をかがすなり

裏大山

北壁の屏風紅葉が吹き上げる

高槻市 福田丁路

昭和四十六年新春

冷凍の鯛がのさばる新春や新春
口数も色気も多い未亡人

ノコノコと時効になった顔を出し
爪を嘔む癖が治らぬままに老け

出雲市 弘津柳慶

宮城へ背をむけ団体へ説明し

手ごころを加え過ぎたと負けおし

社交下手な夫へ妻のよく喋り

ハイキング茸見つけて小休止

姫路市 隠岐不酔

逃げたあと叩いたやろと蠅叩き

減産に台風までが寄りつかず

義理立ての見合いがついに行きたい気

ガメツウに蓄めて誰にやるつもり

豊中市 戸田古方

ブックカバーの黄色が秋に派手すぎる

ハツと気が付けば御数珠忘れてた

人小さく走らせて時雨すぎゆく

阿蘇山は嘖かず夫妻無事帰還

大阪市 吉岡美房

煩惱は裂けし柘榴に極まれり

安静のベッドに自動巻止る

憎らしい男で苦勞しています

逮捕状犯人の子供に見つめられ
熊本県 有働芳仙

薄給の枠で明るく子は育ち

よみがえる未練へ珠数を握りしめ

男だます涙が光るシャンデリア

独身の孤独に帰る夜の鍵

竹原市 山内 静水

私は倅せ明日があろうとなかろうと

しみじみと妻の寝顔をのぞきこむ

たしなみの化粧素顔を見せまじき

子が二人夫と出る日のアイシャドー

島根県 藤井 明朗

予算不足神話の山も崩れかけ

神話もう世代に遠く過疎の村

いい話洩れて商魂抜けめなし

新春へむらむらと意欲だけは持ち

松江市 中川 晃男

お喜び申して少し嫉いて居り

中年の純情或るとき邪魔にされ

虎の威を借る生意気な口が過ぎ

石段のくぼみを登る寺は秋

倉敷市 野田 素身郎

潮時を考えている妥協案

爪を染め髪染めマキシをはき無職

鈍感を装い深入り避けている

錫婚式まだツーカーとはいいかぬなり

門真市 福島 鉄児

愚痴だけを残してやっと去に仕度

焼跡へ落目になった歩を運び

お向いのホームは冬の日が当り

産むことに決めて平和を取り戻し

大阪市 天正 千梢

出す腹はないがおだてにのってやり

おそろしい事の一つにお金持

他人のはじまり遺産分けてから

世の中の肥料となつてつがなし

高知市 川竹 松風

婚約をしてから娘他人めき

口笛を吹いて笑われる齡になり

太陽の死角で夏のコケが生え

鳴き止んだ虫へ誰かの靴の音

和歌山市 垂井 葵水

公私ともネクタイ曲ったままでいる

もう一度よりを戻してみたい人

お針子がそっと着てみるニューモード

先様の都合旗日にする法事

大阪市 中川 滋雀

五分五分の損で手を打つ判を押し

写真には旅のスリルの影もなし

保津川下り

同舟の袖すり合うた声はずむ

嵯峨

絵のような景色で嵯峨野黄昏る

岡山県 直原七面山

死ぬ程愛して告白はまだ

骨壺の中の恋人

隣りの席が美人で疲れ

娼婦と化せし昼の貴夫人

大阪市 河井庸佑

先生に見抜かれていたカンニング

下馬評はいつも昇進する予定

時差出勤している顔がまた出会い

まずほめてそれから批判するつもり

姫路市 村上春巳

てれくさい二人っきりの屠蘇を酌む

年越し風邪を夫婦でかばいあい

七五三今日から冬の播州路

五百羅漢代表さんに供えとく

倉敷市 水粉千翁

悔い多くして神の声聞いている

孤児の呼ぶ空は答えぬままに澄み

石磨く話せばわかる艶を出し

真実は一路今年も菊が咲き

八尾市 高杉鬼遊

白柳師追悼吟

誘うてはくれぬ柩の旅となる

手折られし菊一輪の巨きかり

教えまだ仕残し西へひとり旅
弔吟を捧げて苦言もう聴けず

大阪市 児島与呂志

疲れに疲れたと機嫌よく夫

気にしてる鼻可愛いと云う夫

酔うたはるさかい嘘はこらえとく

ためされているとも知らず旅に出る

米子市 八木千代

白柳先生ご他界をきいて(一句)

訃の耳へ思い出の鈴鳴り止まず

残り火のくすぶりいとしいものと抱く

名刹の歴史ひんやり胸に来る

ひとことの余韻に女賭けてみる

下関市 志賀木石

新聞ヘカタカナ辞典首っ引き

又かとは色にも出さぬ聞き上手

酒が酒飲みだした目が据わって来

惜しみなく奪い与えて愛極致

松江市 岡崎祥月

誠実に生きる喜び今日も抱き

直線を愛し曲線も亦愛し

片意地の中に見つけた人情味

甲乙丙子等それぞれの道に生き

岡山県 横山一声

農薬で死ぬのは害虫だけでなし

見込まれた相手が少し気に入らず
金借りに来るに土産が豪華すぎ
風雪に耐えたが公害に耐えられず

神戸市 仲 どんたく

偏屈と偏屈同士実る恋

大安の葬儀に微醺の会葬者

ホステスの縁談ふんふん聞いて飲み

茜雲無口の女の思慕つもの

松江市 小林 孤呂 二

父さんのみち草母さんだけが知り

いつもより遅い定時を案じられ

勝った日の祝盃こぼれ滴りぬ

農相沖繩で暴言

盾だけで足りず矛先覗かせる

竹原市 小 島 蘭 幸

ふと弱気目無しダルマににらまれる

さかさまの世へさかさまで歩けない

口笛にメロディがなし十二月

もう恋になつてふたり阿呆らしく

松原市 谷 垣 史 好

日傘クルクル嬉しいことがあるらしい

険の底に俺の死にざまが見える

ねんねこが似合う夫に成下がり

白柳先生の死

弔吟へ遺影ひと言云いたそう

伊丹市 小川 静観堂

友遠方より来る瓶さげて

孫を入れる湯加減結局ママを呼ぶ

一万円で欧米旅行二人の夢だった

おはらいのあの音なればこそ浄められ

奈良市 宮 口 笛 生

正月を帰省せぬ子の事に触れ

ええ方に解釈弱気でよい私

ボーナスが出たら約東多過ぎる

け飛ばされそうに師走おしせまり

和歌山市 西 尾 公 作

特売に十人十色の炎の眼

生き字引と言うて年功支えられ

優勝盃床にならべてまだ老いず

火入れ式神話に頼り日を定め

竹原市 森 井 菁 居

散り急ぐ木の葉に悔は無きごとし

力尽くへチマに秋の陽がうつろ

つゆくさの己れを知った身づくろい

哀悼白柳師

大阪府 川 口 弘 生

2DK娘の客に追出され

艶種も七十才のは喜こばれ

贅六の舌も冷凍魚に鈍り

父ちゃんの味でスキヤキ鍋かこみ

岡山市 川端 柳子

方向音痴だから運命に導かれ

逆境の友に贈りたい景色

デリケートなのよとシャボン玉自爆

公害の対策煙草の煙る部屋

小松市 浅野 芳朗

講習会結局買わずつもりなり

やくざまたあくどい金で保釈され

退院が近い同士で散歩する

香煲も近いと思う見舞金

愛媛県 村上 旭童

村すてた子をおもう日の枇杷の花

適当に逃げる気だった酒に酔い

鉢巻をしめたダンブをやり過し

変屈というかくれミノきた男

大阪市 福井 野迷路

宇宙間に一発野球のことだった

蜻蛉釣りのデパートへ行つたやら

教科書の神話敵禁漫画読め

老醜の友に我身を映つしてみ

倉敷市 松下 梁水

天職と自覚した日の土を嗅ぐ

口惜しさに耐える鼻唄とも知らず

魂胆があつて女房殿をほめ

川柳道場牌互選第二位

敗北感いま星霜の差を悟る

広島県 高橋 鬼焼

貯金箱小銭ばかりの重さなり

へそくりをかぞえて買えぬ好きな柄

灰皿にて受けとめる妻の愚痴

まな板のリズムに合わす妻の唄

倉敷市 小野 克枝

足元を見抜いたらしい目がこわい

決め兼ねる肚を迷わす甘い声

主婦として持つハンドルのままならず

女です たまにはデパート歩きたい

平田市 久家 代仕男

古寺の格子浮世に染まぬ色

けち臭い愚痴くどくと立話

ぼろくそに渡り合う仲うらやまれ

呼びとめて茶をいれかえる菊の出来

倉敷市 小幡 里風

濡れ衣を着たまま神を信じ切り

結局は癌でなかった高笑い

鳴き声をかえて戻つた捨てた犬

四捨五入その四捨の中に僕が居る

和歌山市 野村 太茂津

元旦だ君が代最後まで聞き給え

パチンコ屋虫干ししたい男たち

街の貌変り馴染めぬ里帰り
柔道着黒帯だから持ち歩き

守口市 村田 瓢太

能登の旅(二句)

瘦せ土地に生活の知恵千枚田
輪島塗り零一桁を見間違ひ
深呼吸さえうかつに出来ぬ街に住み
減反をあざ笑うてる米の出来

八尾市 香川 酔々

一本の幟が祭 過疎部落
減反へ雀を追わぬ案山子佇ち
雷の爪跡ですと注連張り
使ひよう如何で切れる僕ですが

西宮市 島居 百酒

グアム島旅行

馬鹿にした暦をめくる佳い日どり
あの戦こんな浜から上陸し
軍服の汗を冷やした椰子の風
戦跡へガイド日本も賛めておき

尼崎市 高津 徹也

初明りとどこおりなし初荷なる
教え子の字のたどたどし寒見舞
久方の故郷に帰りて年男
春の朝仲人として帯をしめ

岡山県 坂井 三葉

三つ目の欠伸交番に無事な朝
句読点ない人生がまだ続き

空転になる夢今年も抱いて暮れ
如露を持つ手に盆栽笑みかける

笠岡市 出原 真奇

訪問を一寸匂わす年賀状
子が巢立ち猫が子供になって呉れ
小走りに帰ってくるのも十二月
客が好き世話好き酒も好きな父

小松市 馬場 魚山

食べ飽きて飲み飽きてすむ村祭り
バスの旅酔う苦しみを知って乗り
非常口聴いて着替える旅の宿
修理工油にまみれたままで恋

島根県 堀江 正朗

もて余す時間があって無精髭
妻病めば砂噛むごとし茶漬け喰う
悔多し一途に生きて振り返る
見えぬのを忘れ肩を張り胸を張り

倉敷市 竹内 翁童

君に似た息子だよと師は笑い
専門語使って闘病板につき
おねだりは孫へもたせる嫁の知恵
残業の一人へ守衛気をつかい

岡山県 出原 敬一

さざれ石岩とはならぬ預金額
忘年会だけは主役の倉庫番

終点が見えて来膀胱ホツとする
信仰のわりにえげつなく儲け

東京都 増田次章

酒気なくて肩身がせまい終電車

同業の広告ばかり目にはいり

真剣な大声電車の運転手

不器用を誇りに生きて友は逝き

鳥取県 川崎秋女

船上山にて

リンドウの紫こぼるる茶円原

雄滝と雌滝紅葉競い合い

停退の日のネクタイも色褪せる

腹の立つ日の釣銭まちがえる

奈良県 石倉旅風

会釈して知らぬ同士の通い路

生きている証拠にしてる耳掃除

俗っぽい古蹟の寺の台所

桜井市 岩本雀踊子

ちっけなもめ事職場へすててくる

珍客へ夫の財布もすいとられ

季節花供える地蔵にある平和

大阪市 市場没食子

背のびして覗いただけの月の石

余生まだ欲去り難く勤めの身
駄句刷って自己満足の年賀状

西宮市 若林草右

ビール値上げコップの泡もこぼすまい

格式に押しつぶされてまだ嫁かす

落葉掃く箒にもある上手下手

大阪市 木村水洞

女房に貞節たてる一人旅

近江路

諺のとおりに鈴鹿しぐれて来

特産のコンニャクだけの土産なり

愛媛県 渡辺曉童

百姓の弱さをかくす嘘に馴れ

そう言えばお玉杓子もへりました

ふるさとの点景牛も馬もなし

笠岡市 木山遠二

ひそやかな葬列みんな俯いて

叩かれたのより叩いた方が泣き

二見浦

夫婦岩水平線が高すぎる

堺市 河内天笑

白柳先生を悼む

仕事着がへなへなへなと悲報きく

ついていくわけにもいかんから淋し

ドゴールと歩いておわす雲の峰

札幌市 平野 青夜

紅葉狩鬼女の舞うかや谷の湯気

兵庫県 遠山 可住

割箸を口で割ってる江戸生まれ
郵番はまず孫覚え子が覚え
病院の廊下寒々と秋深む

呉市 林野 魁光

コンピューターころは遂にはかりかね
どないなと思えシャッター降りたまま
積立ての七分あたりのいいプラン

呉市

酔いさます唄は近道せず帰り
竹活きて不純な恋をあきらめる
用件を名刺の裏で頼むコネ

神戸市 小浜 牧人

夏の汗搾りつくして秋をやせ
一ト口茄子小さい秋見つつけた
兵庫県 河原みのる

神戸市

貧乏を楽しむごとし小鳥飼ひ
キャラメルをしやぶる無聊を恵まれて
請求書甘いお世辞も腹が立ち

岡山県 大森 娛句楽

北海に少しは熊の棲んでよし

大阪府 有信 新之助

叱られた猫叩かれる耳構え
日本で貧乏神が行惑い

片手ではたばこが燻ぐる長電話

愛知県 大谷 月都

盛装で出て漬物を買って来る
帰納する処を知って沈黙し
澄み切った湖底に空岳寒々と

京都府 都倉 求芽

影ばかり大きく映して心病む

奥八瀬

川を染め滝染め紅葉に陽が乱れ

玉川温泉

テレビ虹から

家内中みんな戻った灯が消され
ブレイキの軋みで朝刊うちにくる
父親はさんざん泣かせて洗いあげ

米子市 林 瑞枝

好運のわが娘に過ぎた恋実る
人情をあてに団地へ小犬捨て
ライトに目くらんだ猫の死を悼む

鳥取県 清水 一保

南国へ旅立つつばめを声援し
何時までも耐えて匂えよ野辺の菊
お隣りも円く平和に秋灯下

倉敷市 藤井 春日

菩薩にも夜叉にも化ける恋と金

頬打った方の涙の美しい
もう先も知れとる舅だ脊を流す

鳥取県 森田布堂

愛着の煙管と明治生きている

人間の欲素うどんで一級酒

ストープの輪に近よれぬ新入社

岡山県 池田古心

目覚しの鳴るより先に起きる釣り

母送る責任隠居して居れず

苔生えた甲羅貫禄無視出来ず

鹿児島市 土岐トク子

ふるさとの柿の実我れを迎う色

七五三今日の晴着の晴れがまし

カモシカに似て超ミニがよく似合い

東大阪市 竹中肖二

チョン切りたい枝に缺が届かない

女性上位今日は老妻紅葉狩り

苺の輪ボンヤリ見ている事務疲れ

東大阪市 竹中綾女

薬塚の形の変わる県境

重文の彦根の天守小じんまり

菊華展金賞銀賞先ず眺め

大阪市 本庄金三

序文だけ読んで中味に魅せられる

菓屋葺き一番鶏の声で起き
来る年に何かありそな終い干支

小松市 四方天弘美

出稼ぎの便りが届く山紅葉

断れぬ性質で予定又狂るい

倅せが続き崩れる日を案じ

和歌山市 土谷城石

株相場喋ってタオル置いて去に

指切の催促つらい日曜日

無い艶を芸が支えて出る年増

笠岡市 松本忠三

飛び出したくせに田舎の空気ほめ

思い出の軍歌途中で忘れし

冬眠の支度へ鍼の無情なり

大阪市 西川誓二

狭くとも和気あいあいに顔揃う

仕合せはカラーテレビも荷に飾れ

生甲斐をなくした日々を持て余し

出雲市 原独仙

世辞笑いすれば図に乗りまくし立て

狂い咲き暦の方が戸惑えり

光陰へ頭は薄れ髪は濃く

富田林市 岩田美代

自己嫌悪深まる秋に茶がにがい

正義感炎やせば敵がたとと出来

おだて今日すなおに受けて切る自腹

守口市 羽原静歩

富士にて

見渡せば富士とススキと空の青

浜名湖にて

館山寺入江の奥の秋の空

養老にて

ハイウエイまっすぐ暮れて夜となる

菅屋市 丸川初甫

年金改定車の後押しに似る

置き去りの新聞わがもの顔でよみ

奥さんと云われ屑屋へてれくさし

笠岡市 木山要次

年甲斐もなくジャンケンのなごやかさ

曇りなき人羨やまし高笑い

砂浜に急がぬ人の足の跡

奈良県 草深酔升

奈良公園(一句)

たそがれへ鹿物足らぬ顔で待ち

うさ晴し小瓶とチーズで事が足り

よんどころ無く老妻と神詣り

美禰市 安平次弘道

また株でいかれ茶柱信じない

マスコミを味方に怒る小市民

良縁ともう財産に親がほれ

宇部市 平田実男

お隣りが建増しをした妻の愚痴

チャックから中年肥りを教えられ

妻自動車学校へ

せめてもの協力洗濯物を干し

松江市 柳楽鶴丸

男にて候妻子養う安サラリ

女房が笑う亭主タブー集

一対一男一匹胸を張り

堺市 高橋千万子

暮しの灯小さく大きな愛をだく

愛はせつなし鍵をかけても危ぶまれ

年の差がこうもはげしくうらたえる

鳥取県 谷無閑

金歯ピカリ女ニヒルな笑い見せ

老いて尚憇うどころか悔があり

親として云えない過去は目をつむり

貝塚市 野坂つき子

コーヒーケーキ女のぐちはまだ続き

お化粧をとれば私の顔になる
晩秋の夕日に細いシルエツト

高槻市 山田季賛

結局は頭下げたで許される

工事追いこみ中

円満に話がついた杭を打ち

立退いた跡の雑草をブルで押す

奈良県 西辻竹青

この十年

嗣子逝きてこの十年の長かりし

加害者は借家住いの無一文

無いものは出ないですよと言う姿勢

大阪市 今西章雅

風采を構わな過ぎると妻小言

いいご趣味ですなと短冊かかされる

松江市 吉岡通児

四十六の誕生日を迎え(二句)

あと十年たてばどうなる社会相

分別盛りなどとその先見すかされ

島根県 小砂白汀

一葉また一葉たしかに地へ還える

漬物の味も覚えてから嫁かせ

大阪市 宮地双楽

石仏話してみたい心澄み

これからは商売かえて再軍備

竹原市 時広一路

こけしふと私に話しかけてくる

何もかも包んで月光揺れる海

京都府 清水谷 句楽坊

八十三才を迎え

人生の変化期わかる年になり

私念誦仏もしかと聞くを知る

自選

名古屋市 吉田水車

三カ日せめて公害忘れたし

PPMハマチの骨もへち曲り

結局は特価部へ行く夫婦連れ

姪の結婚に

大空へ心して行けめおと鶴

高槻市 若柳潮花

名神の秋嫁の荷が突走り

盃がひと廻りしたことはじめ

誘われたところはくるまも泊るとこ

花代子香港に発つ

見も知らぬ街ではぐれていやせぬか

堺市 藤井一二三

故清水白柳先生に捧ぐ

心の支えひとつ崩して菊が散り

八尾市 古川鶴声

人力車ビルの谷間に生き残り

凡人になれずピエロで過す日々

大阪市 不二田 一三夫

ウーマン・リブ男も産めと云いたそう

三島由起夫氏自衛隊乱入（45年11月25日12時5分）

行動の美学へ三島 腹を切り

寄席二句

張り扇（せん）へ捨丸じょうずなタイミング

「歟瀉」のような夫婦でコンビ組み

★

西尾 栞

祝藤井明朗氏還曆

幸福は趣味で喜こぶ赤頭巾

印度ムルタンの壺をおくられて（一句）

ムルタンの一徹の瞳の輝きを思う壺

三カ日孫六人の渦の中

菊沢小松園

火の海になる扉とは知らず開け

手のとどくところの虹が掴めない

味の交らんうちに仏壇から下げる

断絶のあの子も今年はたち過ぎ
餅花を飾り終ってから喧嘩

川村好郎

白柳氏急逝

無理すなと見舞うてくれて先に逝き

褒め仰ぐうちに紅葉は散るものか

アルバムのここにも遺影笑み給い

白柳へつづく靴紐締め直し

若本多久志

悼、清水白柳（二句）

散る桜残る桜を哀れまん

浄瑠璃寺にて（一句）

落葉散る池辺三重の塔ゆれる

哀れなる親心みる七五三

結論を先に借金断られ

白金懐炉もう出しといてと古稀近し

北川春巢

反抗期おるにウカツな口を利き

足跡のない毎日が早う過ぎ

六甲から有馬へ（昭和四十五年十一月）

歩かずに来た六甲は風寒し

有馬もう療養をするとこでなし

久々の有馬踏む土減っている

近 詠

須坂市 高峰 柳 児

票になる猪口へくどくど酌ぎ廻り
連休の退屈給料日とずれる

なまけ癖くらしの底であわてない

世渡りの秘決と別に金をため

大洲市 米 沢 暁 明

神様は素通り展望台へ来る

桐一葉達観をした音で落ち

文化とは土を踏まない生活か

自衛隊大佐中佐と言わぬだけ

詩はきびし

高 鷲 亜 鈍

詩はきびしハンディキャップを許さぬ盲

恥部がどうポインがどうの11PMにやつかし

酒呑に三億円は要らないね

吾娘にもありがとうございますが口から出

女房を昼まで寝かす腹の虫

くるみくるみくるみひねもす胡桃

和歌山市 秋 月 宏 方

物価高焼いもだつて負けていず

宝くじもう売切れた十二月

小豆島にて

島の宿どの部屋からも海が見え

今治市 月 原 宵 明

枕をあげに灯火親しむ

祝日を出て行く職に子の不満

ポリユームの割に小さい足を持ち

名古屋市 長谷川 鮮 山

大手振って歩けと秋の青い空

参考に一応聞いておく話

梅雨止む間水虫ぐすり買にやり

テレビ等止めてはよう手紙をよんでんか

障壁がないから虚無は素通り

二回目から一升瓶持参とはうれし

先生を消す二升目おまえおれ

金歯ぼろぼろ先のいのちを計算し

お祭の石も御輿に担がれる

寒行は自分のためを通りこし

背中から消せない悔の刺青

はつきりしろよゼニが欲しけりや按摩しろ

中老と云われこの頃巾が出来

岐阜市 市 川 鱗 魚

生真面目に生きて気の立つ十二月

落ちぶれて一っを淋しい京都弁

レントゲン大事にしやが気につまり

小松市 山 上 千 太 郎

七十のあとの半端の年わすれ

新年のたより切手も春の色

働いた手を正月の膝におく

今治市 長 野 文 庫

コマージュル繰り返えされて信じこみ

歯の抜けたよう賑かなのが死んで

黄銅六角ボルトナット

及び特殊換物全般

合資 西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地

TEL 043-452-1144

夜間 043-452-1144



京都鞍馬山上で生々庵主幹

新春雑感

——七十而從心所欲不踰矩——

中島生々庵

自分の過ぎて来た生涯を顧みて孔子は「七十にして心の欲する所に従いて矩を踰えず」と言った。十五才で学問に志し三十才でなんとか一人立ちが出来たようになったとも言っている。昨今のように早熟、おませな時代に育った者なら、十五才位で外国語の読み書きする位のはざらに居るし、一応哲学めいた理屈も言えるだろう。ましてや三十才にならなくとも社会的に一人立ち出来るのも珍らしくない。俺も孔子ぐらいに偉らいのと違うかとか妙な考えを作り出す人間がないとも限らない。ところが、四十而不惑、五十而知天命六十而耳順、となつて来るとだんだん心細くなつて来て、人生行路の疲れもひしひしと出て来る。その隙につけ込むように物欲、名誉欲というものに誘われて黒い霧に包まれて終つたり、肉体的にも破滅してゆくのが現代人の姿であつて、遅まき乍ら孔子の偉らかつた事を知るのである。

私は六十になつたら耳で聞いただけですぐ理解出来るようになったし、七十になつた時には自分が考え通りにやつた事でも、それがいつの間にか道徳人道にかなつていてという境地にも達したと、自分自身の口から公言出来たのは孔子なればこそである。そうした感

頌 春

川柳塔

参事一同
常任理事一同

できたての生ビール

アサヒビール 本生

レーベルの日付けは新鮮なうまさのしるしです

概にしみじみふける齡に私もなつて来たのに気付く。うっかりした心構えで論語を読んで居ると、四十になつたら感わぬようになるぞ、五十になつたら天命を知るようになるぞと孔子が教えているような錯覚を抱き兼ねないという、己惚れも甚しい駅弁大学の卒業者があり得るわけ。その点を心配して呉れた私の中学時代の漢文の先生が言った言葉を記憶している。「論語のこの章を読む時は、孔子曰の下の方はすべて命令形にして読め。即ち四十になつたら感わぬようになれ、五十になつたら天命というものを覚れ、七十になつたら思うとおりに行つてもそれが決して矩をこえない域に達するように努力をせよ。こうした心掛けで読むのだ。お前らは七十になつても八十になつても恐らく矩をこえないという芸当は出来そうにないのう」と笑つた。この漢文の先生の言葉が痛い程肌感じて迫つて来る。

ところでわれわれの日常生活は少々無理だと承知の上で若い者と麻雀で夜を更かし、酒も飲むし、徹夜して原稿も書く、飛行機や新幹線とんぼ返りの旅行もする。お若いです、お元気ですなあと周囲から言われると、ついその氣になつてハッスルもする。そこに知らず知らずのうちに勇み足が重なるのである。学者が教えるところによると、私達の体の細胞は（ガンのような異常な細胞は別として）胎内に居る頃から新生児として生れ、30才位までを頂点にして分裂増加して来て50兆個ぐらゐになる。頂点に達すると漸次減少していつて体の各部分の機能が質的にも量的にも低下して来る。これがとりもなおさず老化現象といわれるものである。腎臓でも心臓でも手の握力でも30才代と70才代とは約半分に低下するし無理した負担の回復も六倍も七倍もかかるという。いみじくも益軒先生はこれを「老人の冷や水」と言つた。

私は何も劣等感をかき立てて消極主義で行けというのではない。昨日の無理な借金は今日中に皆済にして新しく踏み出すべしと言うのである。しかし、そこが言うは易しという一線の難しさでもある。無理がない生活とは結局背伸びをせぬ事、大地に逞しい足跡を確めながら歩く事である。

必ずしも古稀老人のくりごととばかりは言えぬ。心筋梗塞等という病名をしばしば耳にする時節である。一年の計を立てる亥歳の元旦にこの一項を加えておいても無駄ではないと思うからである。

④
お疲れさま！ さあ、アリナミンAです……



タケダ

健康と心をつなぐアリナミンA

効能 = 疲労・神経痛・筋肉痛・眼精疲労(調節障害)

川俣柳 初篇研究

(九十)

前田喜代人 川端柳風

岡崎重義 高須啞三味

清博美丸十府

藤井和雄 岡田甫

653 喰摘の次に浅井が首を出し

用 弓

清「閑田次筆」に「織田信長公越前の浅井父子、浅倉義景等を討亡し、其生首を孟としていふ、此三人われに大に苦勞をさせて、今は思ふままなり、悦びの孟なりとて柴田勝家をはじめ一座に是にて孟を賜ふ」とある。すなわち織田信長は浅井父子等を討亡した祝として酒宴をひらいたが、その時、浅井父子等のどくろを孟としたのである。喰摘(くいつみ)はすでに説明されたから重複をさけるが、句意はつまり、お祝いの重詰と一緒にどくろの孟を出したというのである。

藤井「小生にはわからなかった。敬服。高須「評釈」も「？」で不解の句。さすが読書家の清氏、よくぞ信長対浅井父子の句を解されたり。叩頭。

前田「浅井のどくろ孟はよく知られているがこれを表現するのに「首を出し」はいただけない。クイズ臭が目立つ。

岡崎「浅井が首」は、どくろ孟の異称。礎稿のような伝説にもとづいている。しかし主題句は、その浅井討亡の祝宴ではなく年始の礼に来た客に、食摘をすすめ、つぎに大孟で酒をすすめたということではないか。どくろ孟はやはり「閑田次筆」(文化三年刊)に「浪華の士、永田某は諸芸に通じ酒は大上戸たりしが、秘蔵の巨孟あり、どくろを金箔にて塗りたるにて、八合入りしなり」との例もある。

丸「礎稿贊。但し討亡の祝いでなく食摘とあるから正月の祝いと見る。「信長公記」卷七に「天正年申戌正月朔日」の条に信長が岐阜城で正月の祝いをした。他國の者が退出した後、御馬廻ばかりになってから、「去年北國にて討とらせ候、一朝倉右京大夫義景首、一浅井下野首、一浅井備前首、已上三ツ薄濃ハクダニ」(金粉を以て色どりたる事)にして公卿に居置御肴に出され候」と記してある。岡崎説の如く見られぬこともないが、前引信長公記により、詠

史句と見る。

しやれかうべ出して信長酒をしい

天元宮²

岡田「丸先生の説、さすがと敬服。もちろん詠史句。

554 よし仲の如来を丸屋持て居る

万 聽

清「丸屋」は旭如来を安置していたので有名な吉原京町二丁目、丸屋甚右衛門の妓楼。「よし仲の如来」は、木曾義仲を旭將軍と叫ぶので、旭將軍を旭如来とシヤレタ言葉。

木曾殿の守本尊丸屋持ち

將軍も弥陀も旭は北の國

など、類句もかなり多い。なお、この旭如来は恵心僧都の作と伝えられている。

丸・岡田「贊。

555 權藏といふ中間が作り出し

泉 河

清「權藏」は草履の異称。中間は武家の下郎。侍と小者の間に召使われていた者の

ようで、この中間は給金が非常に少なかつたので、草履やワラジをつくって人に売っていた。句意は権蔵という草履をつくったのは中間の権蔵という者であるということになり、権蔵に二つの意味を持たしている。

高須 妙な表現だが「権蔵という権蔵草履を造り出した」というような言いまわしを中途を略していった句で、説明だけの句というわけだが、幸い権蔵という草履のあることが判っていたので句意は解けたが、ほめられる句ではない。

前田 権蔵という名は仲間にあざわしいからいった洒落とわらいであろう。

権蔵を嫁にはかせる六阿弥陀 三四・29
権蔵をはいた千鳥の愛らしさ 五〇・14

山口、福岡、長崎県の炭坑では、石炭仲仕（主として船に石炭を積込む労務をする）をこんぞうとよんでいて最近まで「こんぞう」（わらじ）をはいていた（現在では地下足袋）。また九州では「ごんす」といって、武者わらじをこうよんだ、金剛わらじからきた言葉の変化である。

丸 岡田 諸説に尽きる。

556 清濁で客をもてなす賑かさ
清 三月雛祭を詠んだ句。清濁は清酒と白酒の意。清酒は男の客へ白酒は女の客へ出してもてなす。

五 連

清濁を分けてもてなす雛の客 一三・31
という類句もある。

高須 太つ肚のことを「清濁あわせのむ」という。この言葉を活用しただけの句だが、当代でもこの手を用いる作家がかなりある。例えば「千客が万来しては困るなり」なんてのが、東京の句会で抜けていた。

丸 岡田 磯稿に賛。

557 あの大黒をみせやれとふといやつ 一 甫

清 大黒はいくつかの意味があるが、ここでは僧侶の焚妻をいう。

お寺では福神在家山の神 三九・22
大黒は五戒のうちの一つなり 二四・13

大黒のお腹ごもりは和尚作 三五・13
藤井 大黒を「あの大黒を」「ふといやつ」だから、浅草年の市の福盗みの大黒だ。僧侶に向かつてこうは云うまいから。

大黒は盗んでばちにならぬもの 二四・26
正直なところは 大黒はか盗み 二二・8

即ち、例の大黒（年の市の獲物）を見せろと云われたふとい奴と解した。この男も同類でふとい奴同士の獲物くらべとみたが。丸端 藤井説賛。木彫りの大黒像で商人もなるべく知らん顔でぬすませた。

高須 太い奴は藤井氏に軍配をあげる。藤井説通り「太い奴」が僧侶同士とも檀家ともとれぬので、これは年の市の福盗みに間違いない。しかし商人も知らん顔で盗ませたなんてことはあるまい。

大黒を盗み一目散に駆け 拾一

見つかってこの大黒はいくらだの 拾二

大黒を買って来たのに盗んだか 二 観 10
大黒は盗むものだと言わぬなり 四一・46
大黒は買ったに悪い評議なり 四四・17

等々の句がそれを物語っている。

前田 大黒を持っていくのも、またこれを太い奴といったのも大黒を盗んだ同類であるが、「あの大黒」の「あ」は、大黒の佳品を暗示させ、盗み負けたくやしさと、下の太い奴を表現したところなかなか面白い。川端説の知らん顔で盗ませたは、盗まれることを暗に意識しながら売っていたのではなからうか。

丸 小生は盗んだ同士の大黒ではなく、市の商人に言っている客のコトバと解している。下五の「ふといやつ」はいかにも買いかの如くよそおってそういうとはさても太い奴と見る。「みせやれ」は仲間同士の言葉とは受けとれない。

大黒はそれからごろんじやりまじやう 三一・19
岡田 丸先生の御説の通り。

西尾 栞 著

句集「水鶏笛」

送料共 六〇〇円



故路郎先生の17歳時代（明治33年3月25日
うつす）このころから川柳をはじめられた。

（三十一年六月号）

三朝温泉にて

混浴に男の方もうしろ向き

失礼々々と混浴へためらわず

三朝ぶしかえしやせぬとは誰のこと

橋ぐらいまでは見送る温泉なり
いでゆ

鳥取の砂丘

朝鮮はどこやと談す砂丘なり

砂丘では学者の如きパスガール

砂丘遙けしサンドスキーの Apre ぶり

（四月本社句会二句）

町内の花見二級酒運ばれる

花見酒あいつが酔うて困らされ

「旅人」以後の

麻生路郎作品

— 6 —

（大阪通信病院句会二句）

金が光った入学だとは思ってず

ボクですかなどと入学こましゃくれ

（・名人団平のこと・内容—これは芸一筋に生き
抜いた豊沢団平は自分にとって多くの共感するものが
あり……）

（三十一年七月号）

（山陰川柳大会二句）

ホテルでも日本の酒で押し通し

ホテルとは名ばかり車這入らない

（五月本社句会一句）

もう帰るころに署長の黒田節

（大阪通信病院句会一句）

孫があるなどとは云わず酌をさせ

(三十一年八月号)

織田作の話で更ける水都祭

思い出の橋ばかりなり水都祭

水都祭まだこいさんが居そうなり

パーマする留守にビールをあてがわれ

梅雨明けた庭のサンパツ思いたち

一合の晩酌老子読む社長

妻らしく茄子のいろを自慢にし

あきらめて嫁たを無口と思ひ込み

生々庵医博の新居を賀して

潮の香の新居で今日は何の会

ここを斯うしたらと新居楽しけれ

(六月本社山雨楼忌句会二句)

山雨楼を憶う

眼に残るものみな悲し今は亡し

追憶は長い手紙が来そうな気

(杏林川柳句会二句)

パトロンの槍さびだけは聞いておき

パトロンもそろそろ呆ける年になり

(富柳会句会)

借金のままで死ぬとは思つてず

(・窓口談義・映画「太陽の季節」の石原慎太郎と

村上浪六の時代のへだたりなど……)

(三十一年九月号)

膝頭抱いて日ソがどうのこの

おべんちゃらさかなに既に三本目

雰囲気を愛しただけでくるま呼ぶ

闘病は物干だけの世界なり

慰霊祭病臥なても生きて欲しかった

(七月本社句会二句)

淋しがる男と見えぬ毛脛見せ

毛脛クマツわれ熊襲クマツの裔を自認する

(杏林川柳句会)

中古の靴で憶せず音を立て

(・川柳忌に際して私はこんなことを考えている・
柄井八右衛門や、川柳人蛭子省二氏の受信など)

(編集部)

イノシシ講釈

東野大八

今年のエトはイノシシであるというので、陶製のイノシシの置物の審査員を頼まれた。会場へ行くと約百六十種類ばかりの、それらしきものがずらりと目白押しである。

毎年、美濃や瀬戸の陶産地では、エトの壁掛けや置物を作るのが恒例である。それを銀行や信金やさまざまな会社が、印入にして本年も相交りませずとタダでプレゼントするのである。場合によっては相当の数になるので、茶わん屋メーカーとしては、年末近くのかんりの財源になる。しかし、問題はデザインである。月並でリアルなイノシシでは売れ口はつかない。さりとてモダンアート方式の難解なものでは一般向きではない。このかねあいむつかしい。まるで今どきの川柳みたいである。

さて、問題の審査会場だが、まことピンからキリまである。ヤブがあるからネコではない。キバがあるのでブタではない式のケツサクもふんだんにある。蚊やりのブタみたいなから、ウ丹の甲羅干し、さてはピラミット

型から、菱型のつべらぼうまで—芸術は抽象化するほど普遍性をもつという造型芸術理論のマクラを思い起した。とにかくユーモアたっぷり、これこそ立体川柳のサンプルではあるまいか、と審査後に出たビールをのんで思ったことだ。

「丸山応挙が山中で寝ているシシを写生したのをみた獵師が、このシシは死んでいるといった。愕いて応挙がたしかめに山へ行くところっぱり獵師の言葉通り、そのシシはホトケ画家だったという話があるね。その応挙いわくである。なぜなら、これらの動物はつねに人間生活の中にすんでいて、どんな人でも見馴れているからだ。だから誰も知らないお化かユーレイの方がいっそ描きやすい。かくして彼は応挙のユーレイなる名作を遺した」

そんな話を一席ぶったら、エトのイノシシはどのような教訓をもつ動物か、との質問が出た。左様、イノシシは男性の象徴である。一家の支柱である亭主であり、父性愛のシンボ

ル、そんなところだなと心得顔にいつたことだが内心自信はなかった。

岐阜県も飛騨へ入るとクマとイノシシが今もって多い。岐阜の日報紙の被害記事にいたとき、よくこの山のギョウの被害記事を扱ったものだが、思えば東京のどまん中の光化学スモッグの公害からみれば、なんとクマやイノシシの人の懐っこいことか。イモ畑や大根畑を荒らすなんてこと自体がローカル色満点である。時には飛騨の支局長が、シシ肉を一抱えも荒ナワにしばって本社へ現われた。そのおかげで、こちら大分歯をやられた。シシ食った報いで歯医者が儲かる口だ。

史記や漢楚軍談に有名な、項羽と劉邦の鴻門の会は、この両雄と両方の参謀の馳引で読ませるが、瑯羽の参謀范増が、劍舞にこと寄せ劉邦を殺そうとする。これを見抜いた劉邦の参謀張良が、豪傑の樊噲（はんかい）に命じて、劍舞の相手をさせその企てを阻止しようとする。この豪傑の雄壯な劍舞に項羽が感嘆して、まあ一パイイヤれと大杯をつき出し、投げ出したのがイノシシ肉で、しかも肉の中で一番固い肩肉をどすんと置く。それを相手はムシヤムシヤ食ってはグビリグビリ、それに気をまれているうちに劉邦は逃亡するのである。名参謀范増はかくして瑯羽を見限ることになる。

中国の歴史にイノシシとゆかりのある豪傑がいま二人いる。許猪と岳飛だ。許猪は、両手におのおの牛一尾の手綱をにぎり、たがいに力限り引っぱりさせたが微動だにしない。こ

れをみて驚嘆した魏の曹操が家来にしてボ
ダイガードに仕立てた。だが、この男、強い
ばかりで頭はパー、まさにイノシシ武者の
典型である。これに引きかえ岳飛の方は、ダ
ンチで知勇兼備の南宋の大忠臣、しかも一國
の最高軍司令官である。しかしながら、中国
一の悪名高い秦檜(しんかい)のさん言によつ
て死ぬのである。正史ではないか、「夷堅志」
に拠ると、岳飛はイノシシの精だそうだ。

大体が中国に発生した十二支は、子、丑、
寅、卯などすべて天の星から出たものとされ
ているが、どうも亥の猪が星の精とはうなず
きかねる。そこで易占の方を調べたら、北斗
星の分家と知れた。つまり北斗星が時に精を
散じるかこれすべてイノシシとなるとある。
岳飛もその散精の一つだそうだ。

日本の花札に出ているイノシシは、鉄火場
で俗称ブタという。中国のイノシシもどうも
このデンでブタと混同されているようだ。い
や同一のものでとされていると言ってもよさそ
うだ。なぜなら、豚のニクヅキのない豕が亥
の扱いになっているからだ。しかも、このイ
ノシシ、ブタは、全中国の各地域毎に一つに
なったり、二つになつたりで甚だ心許ない。
早い話が「西遊記」の猪八戒は明らかにブタ
である。

私がいま住んでいる岐阜の田舎にも師走に
イノコ行事がある。こどもが集り、イノコ餅
を食つて一晩が大いに遊ぶのである。
郷土史的資料によると、これは産神とこども
の厄払い行事で、イノシシがイノコであり、

イノコはブタである。中国文字からするとそ
うなる。(諸橋轍次著「十二支考」)

「イノコの晩に、重箱ひろて
あけてみたら、ぬくぬくほっこり

ようようみたら おやじのきんたま」
というのを、私の幼時、大阪のイトコから教
えて貰ったことがある。随の「五行志」の偶
話に右のうたと同じがあるが、イノコ行事
も中国の血筋をひいていることはたしかだ。

多産安産はブタを意味している。
中国に「一竜一猪」という言葉がある。韓
退の勸学の辞から出た。この意味は、保育
園あたりでメダカみたいに群れ遊んでいる子
には、知能にはさしたりへだたりはない。そ
れがやがては竜ともなり、ブタともなる、と
いうことをさしている。

向うみずのことを「豕突」といい、汚い言
葉で「豕牢」つまりブタ小屋か、トイレを指
すのがある。「豕、塗を負う」というと汚い
ことの上塗りをいう。「猪狗もその余を食わ
ず」といったら、人を嘲罵する場合のサイテ
イの形容。

イノシシの審査会から話はブタだんきにお
ち、仁田四郎忠常も怒り出しそうだが、お立
会いは茶わん屋稼業、一人が訊いた。

「チヨコとはサカスキだが、なぜそれを猪
口とかくのか」

これには一寸困つたが、問題に猪突も一法
「それは猪の鼻の穴へんに似てるから…」
と逃げた。この通辞こそ猪口才(ちよこざ
い)というべきだらう。

あなたの川柳をのれんに

書齋に ご贈答用に

洗ってはげない

賜天覧 手描のれん

上質ブロード 五百円 (二十枚以上御価)

発売元 長崎川柳社 池田 可宵

850 長崎市新大工町五

急用 0958 (22) 六九二七

同人吟

秀句鑑賞

—前月号から—

若本多久志

盗泉の水をがぶがぶ飲む時世

吉田 圭井堂

仏法でいう末世を思わず、現代世相への慨嘆ぶり、古諺を引用しての上七、実に敬服に値する。

口銭を不勞所得のように言い

大坂 形水

「利潤なき企業は罪悪である」と言い切つた、松下幸之助さんの思想は、正しい商道と勤勉の結晶を国家社会に還元奉仕するといふ、高遠な理想に基く。企業利益に対し、封建的な考え方もつ人々への警句として光っている。

こおろぎよもうお別れた秋深し

山川 阿茶

何気なく、さらりと詠んだ句に秋の深さがしみじみと味わされる。

それぞれの鍋それぞれの味で煮え

川 口 弘 生

「三十年ぶりの同窓会」という前書きがあつて、この句が生きる。

鈍才が以外な地位にいたり、秀才が凡人になつていたり、ふけ込んで別人の様なもの居る、それぞれ年輪の苦しみを秘めて同じ鍋をつつく訳だが、感慨は交々深いことであろう

はいい話かと相手はお茶をのみ

岡 田 某 人

上七に会話体をいれて、この相手がこちらに迷惑も考えず、長談義をやっている描写が、リアルに表現されて、柳屋を物語る。

こみ捨場と知らずにカポチャ実を結び

ひ

浅 野 芳 朗

こうした句想には類句が多いので注意を要する。然し句主が、こうした環境の中に伸びてゆく植物への愛情を感じられている人間性を頂いた。

結ばれた枝のみくじも春を待つ

川 端 柳 子

おみくじが凶や大凶と出た時ほど、心を暗くするものはない。それを木の枝に結びつけて帰るのも人間の智慧であるうが、結ばれたみくじも、その人に倅あれと祈っている様だと詠んだところが生命であろう。

うちの猫に産ませた憎い猫を追い

森 田 布 堂

人間性の一面に潜む、愛と憎しみの両面を巧みに詠んだ句として、高く評価したい。

ふり向かぬ人見送って秋に佇つ

岩 田 美 代

下五の季感を、上七で一層強く盛り上げて、然も個性を表現されている点、敬服。

うる指さされぬ暮し胸をはり

光 好 陽 子

転ぶことさえも女という不便

小 野 克 枝

二句それぞれ、句意は異なるが、女性として生きていく宿命というようなものを、深く感じさせられる句である。

骨揚げが調理師だった箸さばき

不 二 田 一 三 夫

火葬場や、骨壺の句は今までも、たくさん拝見したが、骨揚げの箸さばきに対する着想、只感服の外はない。

★

◎その他、割愛した秀句

万物に法則人にだけ運勢

逢うまでがいつそ偷しい髪を梳き

人生のいま生きてる美しさ

赤い羽根よけて曲つたここに居

表札に頼りのうても男の名

結局は元の二人になって老い

その先を早く知りたいのに吃り

野 迷 路
千 代
実 男
柳 子
梁 水
独 仙

近作柳樽

秀句鑑賞

—前月号から—

川村好郎

ふと過去が戻って来たよな秋の雨

高杉千歩

氣にそまぬ話に坐り秋扇

武元柳子

下五の「秋の雨」「秋扇」がこの句を生かし詩情を詠み女性の心の奥に動くものを巧に詠んでいる。下五はとかく軽く付けたすように作り易く、それがため全体の句を殺す場合が多い。下五は大切にせねばならず。これ等の句はよく練られた下五と感じた。

心境の変化がペンを軽くする

小出智子

心境の変化がペンを重くする場合がある。しかしこの句に作者のすがすがしい心境がうかがわれる。この作家の作句に対する熱意をいつも感じさせられるが、どうか変に曲らぬよう素直な句を見せてほしいものである。とかく少し認められると氣取った句、所謂作った句に傾くので注意してほしい。

言分があるから障子を強く締め

松高秀峰

感情は箸の先まで来て止まり

鈴木村瀛子

同じような心境を詠んで捨て難い句である。ややもするとどういふ意味だらうかと考へさせられるような句が佳句に推されたたり、近頃の柳界の一つの流行語になつてゐる珍語難語を列べる傾向のある中に、この二句のように誰にも納得が出来、平易な文字の中に新感覚を忘れずに詠まれていることに私は魅かれるのである。

半分は泣いた笑顔で父見舞う

河野君子

やや詠み古された感があるが「半分は泣いた」が凡句から脱し、うまくまとめて一句にしている。表現法とさしせまる実感によつて句が古いと捨ててしまえぬものを読む人に与えるものである。

女房をどなれば債権者は帰り

山元無限

こんな手もある。亭主が上位か女房が下位と見せて、上位か知らぬがとにかく小企業の夫婦がこんな芝居が必要であらう。着想も面白く、ユーモアもある。

どん底の頃を笑えて妻と旅

村井城南

ほほえましい老夫婦の旅である。一生起伏

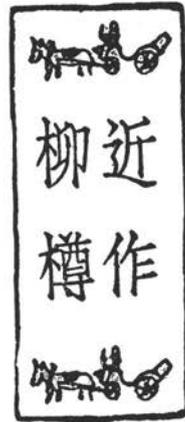
のあるのが人生である。老いて過去の不幸を笑えることこそほんとうの幸せでなからうかそんな事を教えている明るい句である。

お早ようと写真の母にはたきかけ

藤田頂留子

母の遺影を見るたびに懐しく、涙する句はよく拝見するが、この句にそんな暗いところが少しもない。それだけ母に喜んでもらつてゐるような生活が出来、今は逝き母と拝まざるに生きていると同じ親しさに遺影に接していることがよく出ている。「お早ようと」「はたきかけ」がよくその氣持を表現している。一句入選の中にもこんな佳句を味読したいものである。

(前号の執筆者は西尾菜氏と訂正します)



北川春巢選

里婦えりして

大阪市 河野君子

里の湯へ娘に還った身を沈め
さよならと云えず病父に又来ます

菊手向け墓地一きわに秋の色

駅々の乱雲女心かも

新米を信じてもみ穀野に焼かれ

大和郡山市 森田カズエ

週刊誌取替っこして病んでいる

総婦長キイホルダーに鈴もつけ

億円を盗られた話らしくに聞き

おサンマと呼びたいような市場籠

おさがりのお神酒ぐらいは飲める母

守口市 岸本豊平次

尻軽に働かず気が堅い椅子

陽光を一人占めしたビルが建ち

豊作の松茸籠の柴のかさ

公害に自主防衛の鼻毛のび
シャッターチャンスはいはいを追っかける

大阪市 小出智子

病める日の財布枕の下に入れ
財布満して女は何を企める

からからと枯葉は過去の音で散る
捨て猫を抱いて来た子を叱られず

観劇のみんな苦のない顔に見え

大阪市 小谷葉子

甘えてすねて華麗な誕生日
こがらしに負けじ愛のある限り

友見舞う足元枯葉まといけり

才女に遠く好みの柄を選る

白柳先生を悼む

パパと呼ぶ人の微笑よ永遠に

逆立ちでまだお相手をする若さ

大東市 荒木鶴翠

まさに世はジャンボ時代に手内職
逆さまに干されて雨ぐつ用がすみ
口実がないから口笛ふいており

竹原市 三宅 不朽

旅ひとりことさら夕日胸に落つ
足もとを視つめ私が恐くなり

ゆずり合ひすぎても善意まとまらず
頼もしや米寿腹も立て菊も植え

守口市 野呂 杜月

朽ち初めて居ても大黒柱です
万博に咲かせたかった菊の花

彦九郎土下座の上をミニ颯爽
柿むけば北の国から雪だより

和歌山市 ふきあげ 虎城

泣くことと甘えることと夜の銀河
隙間風燃えてはならぬ身の哀し

夜の貨車の延々愛の会話消す
ひたむきな愛に仮面をもてあます

岡山県 目賀 芳月

大物の訃報に菊の真盛り
童顔の親父うれしい流行語

金で面はられて見よか十二月

大阪市 江城 功雄

十一月十二日清水白柳師急逝(二句)
まろやかな句座に心の虹は消え

邂逅の恩師と歩む雲の峯
義足行く冷たい音も霧の中

東大阪市 宮西 弥生

下向きの生活に馴れて邪魔をせず
ふところの免許証が酔わさない
倒産を見下ろすようにビルが建ち

大阪市 白井 孝子

スカートに相談もなく肉がつき

今だから言うと言の口が合ひ

こおろぎに急かされ人形の服を縫ひ

東大阪市 斎藤 三十四

スナップ写真大阪城へ孫を連れ
閑だから犬の鳴声聞きわける

秋茄子のかたさ嫁と笑いあい

鳥取市 近藤 秋星

立候補長い名前が邪魔になり

御静聴させたつもりで礼を言い

冬来ると信じてスキー並べられ

岡山県 山田 止水

定年の日の青空へ親しめず

知恵貸したばかりに知らん顔出来ず

二級酒の明日を信じた酔い心地

大阪市 阪上 十止庵

殺人の許可にあらずや免許証
へソ曲げてみたが一億対一人

わが娘ながらしみじみ三カ日

岡山県 武元柳子

一人居も楽しかりけり玉子酒

百姓は百姓の話秋深む

口答え巧みになって娘の帰省

鳥取県 林隆子

縁談もまとまり虫歯抜きに行き

ハンカチに包む小さな恋もあり

思い出を抱いて生きてるのも女

石川県 山元無限

良寛のようだと金釘流をほめ

人夫いつ仕事するのかビルがたち

おぼる月まだプロポーズしてくれず

富田林市 板尾凡吉

駅前に住んで政治を理解する

十二月乗り切れそうな妻が居り

初雪のニュースでみがく登山靴

富田林市 木村弥栄子

選挙戦落ちた偶像又出馬

航路ない荒海目ざしハネムーン

教養でみがき上げてる素顔の美

大田市 藤田軒太楼

パン食に慣れても下駄を捨てきれず

好物のおはぎ供えて香をたき

打揃い今年もくぐる大鳥居

島根県 榎原秀子

前向きでゆけと失意へくる友情

人間のもろさ概を又送り

魂をぬけがらにして月冴える

大阪市 西本保夫

大声を出してやっぱり平社員

気魄だけ古武士にも似て平社員

学卒の生れた頃から平社員

愛媛県 小笠原仲美

この人も善人の相 孫自慢

敷かれてる息子をはがゆがるは妻

城跡を朝 散歩して文化の日

和歌山市 垂井千寿子

三度目の仲人すませてから別居

コンピューターに計算させた顔の艶

この怒り手紙の外へにじみ出よ

羽曳野市 麻野幽立

今一度揉みたき肩や墓洗う

たまに着る着物で坐る通夜の席

客帰るまでの機嫌の倦怠期

大阪市 堀口欣一

定食の呼名嬉しい雪月花

稲刈がここにも残り城東区

駅弁にリング大きな場所を取り

大阪市 大西為二

友の死を聞くゴキブリの近く這い
ワイパーが激しく雨の逃避行
鷺を鳴かせた腰を孫が揉み

貝塚市 行 天 千 代

カーテンを引いて二た間の家になり
公害でぜんそく煙草でガンになり
十年ぶり生きてる事は素晴らしい

鳥取県 鈴 木 村 諷 子

麦播かぬ村にもビール消費量
世の風にもまれた老の菊作り
初詣でお札売場も新定価

岡山県 武 内 雅 堂

骨のない父だと思ふ年の暮れ
表札の下で番犬みがまえる
角を出す妻に白髪がふえはじめ

和歌山市 樫 村 ふ み よ

退職の近きカガシの思案顔
ゴキブリも組織の強さ蟻が引き
新築へそれぞれがうせじを言い

東大阪市 落 合 思 月

無理をした金で団体疲れきり
よその子の良いとこばかり見て叱り
恩給で足らず夜警で食いつなぎ

新宮市 大 矢 十 郎

人様の評価で暮したいあせり

壁に耳あるから嘘は赤電話
魚市場女忘れた声が飛ぶ

八尾市 飯 田 一 治

ヒゲ振って不安のない虫が飛び
義理に勝ち人情に負けていた財布
妻の留守ながびき酒屋にもてなされ

大阪市 白 石 良 圭

銭湯へ行くにも決心の要る男
化粧する間戸締まり指図する
水だきへ汗して夫婦恙なし

岡山市 谷 森 和 風

鼻唄の機嫌へプラモデルをねだり
恋人の時ほど女房気がきかず
その度に思う孝行まだ出来ず

大洲市 横 田 放 人

箱庭の春菊隣の分もでき
ハイミスのミニは挑戦する構え
趣味だけは隣に負けぬ石を置き

竹原市 楠 貞 子

手ぶらでのそれがうれしい友が来る
お見舞の客をもてなすのに疲れ
思いがけぬ友が尋ねて来る選挙

広島県 南 条 露 声

腹切った同士入湯馬が合い
妻が先死にたいなどと甘えられ

鐘一つ山道深し秋の山

松江市 村 松 醉 步

ぎっくり腰ひなびた村の湯が効いた

長男へこんな顔して為替くむ

子も妻も目玉預けたのをほめた

八尾市 天 羽 清 一

政策は後手ばかりでもベア速し

雄雌の見分けをのどに探し当て

独身と言う手は古い口説き下手

高槻市 山 用 ス ミ 子

倒されたままでコスモス秋を告げ

万博の尾を引く今日も火の車

人間は機械でないと言う保養

新潟県 高 野 不 二

使われる方が面接質問し

楽しみのミニがすたれるとは淋し

尼崎市 小 林 文 月

金婚日よくもここまでこぎつけし

文化の日妻とふたりでテレビ観る

岸和田市 福 浦 勝 晴

サンマ焼く煙りが孤独の眼にしみる

ああしんど酒歌車の旅終る

大阪市 藤 田 頂 留 子

とくとくと社長受け売りの根性論

信号は青今日一日が動き出す

京都市 山 本 峠

プラモデル毀して父をたしかめる

北風のたよりをまっ持っているミンク

鳥根県 大 森 孝 華

鯛雲漁場は吉と浮いてみせ

まだつぼみ手頃な話持ち込まれ

羽咋市 三 宅 ろ 亭

新年やおれもどうやら赤頭巾

八丈島探訪

闘牛へ新婚さんも来てすわり

大洲市 堀 内 晁 風

いたずらな昔名残りの背なの灸

一生を土と暮した大きい手

米子市 石 垣 花 子

子に生涯掛けて初老の二人切り

米倉のネズミ新米ばかり喰い

仙台市 川 村 映 輝

今日からは無職何だかおちつかず

不精ひげ無職になってからはやし

八尾市 高 杉 千 歩

白柳先生に捧げる

手折りても咲く菊なるに帰らぬ師

使わぬ損々母娘して十二月

河内長野市 井 上 喜 醉

ウツプン晴らす盃はぐっと空け

終電車虎と蝶とを無事送り

広島市 植田英詩

起き出して来た病人に気が疲れ
パートタイム妻がだんだん派手になり

小松市 村井城南

俺だけじゃない病院に人が込み
教養の違い日本をあぶながり

鳥取市 山形春海

常連の愚痴にも微笑忘れてず
役付きも平も国旗の出た団地

今治市 渡辺南奉

子は宝 宝にやがてほっとかれ
抱擁へ地球の自転早やすぎる

羽曳野市 大峠可動

バラ色の夢がわたしの救命具
幸福が欲しくて明日へ歩きだす

七尾市 松高秀峰

家中の知恵で台所改善し
楽隠居今日も仏事に狩り出され

宿毛市 瀬田美知

再婚する母を他人の眼でながめ
八十のまだ死にたくないお灸

竹原市 生信笑子

野菊よ野バラよ我は旅人
白衣今日凍りついている笑い

大阪市 里小路

いつの間に娘の部屋にある香り
横やりのあるしきたりへ眼をつむる

熊本市 黒田緑

階段を降りて心の底に着き
キャバレーの酒に社用という若さ

神戸市 横山孜孝

初産へ母の不安がうるさ過ぎ
判一つ散々しぼって押ししてくれ

松原市 守屋万竿

保守革新どっちも公害だけは責め
還暦をわが伴せは孫と居り

広島市 簗田延子

女ふと悲しさ隠す化粧する
夜学にて

解らない授業へネオン明るすぎ

京都府 矢野晴光

マスコミが増やす欲求不満症
見なれたる山をしみじみ眺める日

奈良市 桑原千里

呼びすてのままで復信戻って来
公害の味しか知らぬ子に生れ

鳥取市 両川洋々

叱るのも女房喜こぶのも女房
ハンサムな方の候補が落選し

松江市 内藤喜夫

風景は明治のままの過疎の村

米余る気がねするよに穂が垂れる

河内長野市 森本黒天子

床柱年輪の艶を強く出し

喜寿の祝にまだまだいける猪口を持ち

兵庫県 高橋近江

京都大徳寺研修行(二句)

二年焚きの五基の飯釜古事語る

万博でうたった歌で酒造り

米子市 増田竹馬

絵筆迷う朱か紅か曼珠沙華

名刹のここに浄土あり鐘の音

宿毛市 山本窓花

人形も時代の流れに眉を変え

墓だけを残して村を引き払い

泉佐野市 大工静子

生えるとは信じはせぬがつけて見る

一度だけ言わして貰う腹の底

大阪市 平井露芳

年令を据置き定期で若がえり

宮参り

神聖な場所も主役は知らず眠る

大阪市 河原林比呂路

今日もまた洗わぬ仮面つけている

明日からの余白は妻がうめて呉れ

尼崎市 中

火あぶりの刑にされてる外れくじ

コツコツと貯めて夢みるマイホーム

堺市 栗

タレントを公認するも票のうち

蒸し芋が呼んでテレビの座が乱れ

大阪市 鈴木

太陽と海に出会った夏の幸

紅使う女の姿無我の境

高知市 竹崎

十号が去って塩抜きパンツ干す

水攻めに会って畳屋が儲け

笠岡市 山本

温いもの恋しき季節甘藷掘る

高砂の謡の声に座が繋り

富田林市 川端

喘息もものかわ一献やりましよう

親しくもライバルの腹は燃えに燃え

鳥取市 藤本

反抗期理屈言う子の声変り

親指にくらしを賭けて玉はじく

鳥取市 藤本

母と娘の派手の地味のお買物

明月に女同士はお茶を飲む

谷利美

本

本

藤持

本

木朋子

木

朋子

木

崎寛

崎

寛

山

本柏生

山

本柏生

本

文一

本

佳女

本

和宏

本

和

宏

鳥取市 藤 本 恵 子
夏休みプランがしぼむ物価高
事故あれど諦め切れず買う單車

鳥取市 藤 本 鎮 也
社長だとわかって電話へかしこまり
へボ将棋相手も勤めの裡なるか

今治市 伊 藤 一 郎
水漬は貰うた養子に使われる
休耕で儲け出稼ぎして儲け

今治市 真 山 国 彦
大布団も毛布も着てて蚊帳を吊り
供出を当てる農協貸したがかり

今治市 古 野 伶 人
子供塾マンガも置いて飽きさせず
衣食足ってからの心算が時間切れ

大阪市 本 間 満 津 子
仏壇は黙って愚痴を聴いてくれ
悩みごと順序よく来るおもしろさ

大阪市 鈴 木 生 仏
観光バス腹のビールを出すながさ
来る春の桜見たさに薬のむ

大阪市 木 村 浊 水
ジャンボ型レジャー黙って聞き流し
かしこまってまことしやかに神話ぶち

大阪市 花 田 繁 子

レジャーとはのんでしゃべって喰べ喰い
お揃いで倅せつかむ文化の日

大阪市 松 岡 進
大あぐらかいて娘は足袋をはき
咳してもすぐ公害にしてしま

大阪市 今 井 隼 人
猫を飼い隣を敵にしてしま
孤独をば軍歌うたってまぎらわし

大阪市 木 村 久 子
京の秋今年も倅せ見て廻り
地下鉄に歩道橋年寄りいじめよる

奈良県 草 深 信 義
よもぎ摘みママにまかせて蝶を追
雨の朝夢の続きをみてねわり

鳥取県 林 露 杖
木せいの香が俗臭を追っ払い
病人の気にする話題は母が消し

鳥取市 有 田 鹿 子
煎薬の匂いに亡母の顔浮かぶ
久潤の握り合った手を大事にし

大阪市 岡 本 まさひろ
初猟は目覚ましよりも先に起き
新宮市 小 山 峻

寝屋川市 福 富 隆 子

古川柳のユーモア

北川春巢

現代川柳に笑いが少なくなった、といわれ出して久しい。私もそのことを何度か指摘した。そのことがこの「ユーモア特集」の欄ができた一つの原因とも思うのだが……。

現代の古い川柳人がそうであったと思われるのだが、私自身も古川柳の滑稽さに引かれて川柳を始めたりである。私の少年時代少年雑誌や一般大衆雑誌には「滑稽俳句」という投書欄があって、「俳句欄」や、「短歌欄」と同様に取扱われており、私は投句こそしなかったが、その欄を見て楽しんでいたものだった。しかし近頃はそのような欄はない。またそのような句を作っている人もあるとは思えない。「近作」の選をしても、作爲的に滑稽にいいなした句も時にならないが、それは川柳を誤解している初心者と思える人であるし、没になってしまうので、誌上に発表される機会もない。

私が川柳を始める前「柳樽」を読んでいて滑稽な句が多かった記憶があるので、本稿執筆前にもう一度「柳樽」を読み返してみた。そして、本稿では「柳樽」の中で私が滑稽だと

再発見した句を若干お目にかけようと思う。

それにしても、以前に何度も引合いに出したパニョルの名言「人は何を笑うかによってその人の人柄がわかる」。が肝にこたえて来る。昔読んだ時滑稽だと思った句が、今回は余り滑稽だとは思えなかったのである。私自身の精神の成長だと思つて、一方では意を強くした。

このパニョルの「笑いについて」をテキストにして、以前「川柳雑誌」に「川柳における笑いについて」を書いた時引用した文章が思い出される。(昭和三十五年、五月号)それをここに再録してみよう。

「同じ喜劇的な事柄を、何故われわれ全部が笑わないか。

人間的な価値の段階が一から百までであるとして、私が六十一という価値を自分に与えたと仮定する。二十七や三十四の価値の人間が不幸な目に遭つても、私は笑う気にならないのであろう。私は彼らに対して自分の優位性を証明する必要を感じない。反対に十二ないし十四の価値の連中は、三十一

の人間が失敗したりヘマをしたりすると大喜びをするだろうし、四十二の人間が大失敗を演じると、この上もない快感を味わう。(そして笑いがこみ上げて来る。)だが六十一のこの私にとつて、そんなことは面白くもおかしくもない。」

パニョルは、「笑いとは勝利の歌である。それは笑い手の、笑われる人に対する瞬間的な、だが忽如として発見された優越感の表現である。」という考え方を持っていたのだ。

源左衛門鎧を着ると犬がはへ (初篇)

佐野の馬戸塚の坂で二度たおれ (八)

など、優位者の失敗を笑つた例である。私が「柳樽」を読んで、昔は笑いを催した句は、私が五十の価値しか持っていないかつた時としよう。六十の価値の句はおかしいのであった。しかるに今や私は八十の価値に成長してはとすれば、六十の価値の句には笑いを催さないのは当然である。それでも九十の価値の句には笑いを催すはずであるが、そのような句は、そうざらにはないのである。

優越感の笑いであるとすれば、漫才や落語の笑いはどう解釈すればよいのであろうか。漫才や落語は観客全部が笑うではないか。漫才や落語には阿呆役が居る。彼は観客の誰よりも愚か者として登場する。観客の誰もが、自分よりも価値のある人間だと思つたように彼は振舞う。そこで観客は優越感が湧いて笑いを催すのだ。と解釈できないだろうか。これは前述のパニョルの説と矛盾するが、この場合には、「笑つてやろう」という観客の心

理的前提のあることも見逃せない。

さらにもう一つ。古川柳には吉原その他遊里の句以外にも性的な句が多い。春画を「笑い絵」といい、また「笑い道具」といわれるものも性に関する道具である。「笑い」ということが性的なものに使われているのでも分かる。性的なことに限らず、一般に生理的なことは笑いを催うさせる。

小便で盗人を舐る西瓜舟 (二選)

小便に起きて夜なべをねめまわし (三)

などは人口に膾炙した句である。しかし、私自身、もうこのような句には余り滑稽を感じられない。

隣から戸をたたかれる新世帯 (初編)

この句も、少しばかり性的な臭いがする。

ふんどしはどうだと禿まくられる (二)

「禿」というものが現在ではもう分らぬ存在になったが、ハレンチ学園の「スカートまくり」がこれに類するのではなからうか。識者の間ではこの「スカートまくり」が問題になっていることは周知の通りである。

しかし、「新世帯」の句も「禿」の句も、それが作句された頃ほどには現在では滑稽を感じないと思う。性的な句の代表的なのは「末摘花」であるが、「末摘花」の句も、社会的背景というか、世の中の事情が激変しているため、大声を出して笑える句というのも少ない。

次に「柳樽」を再読して感じたことは、比喩や擬人法の巧みなことである。これが第一に私の膝を打たしめた。比喩や擬人法にはま

だ現代に通じるものが多く残っている。比喩や擬人法がユーモアの一要素であることは以前にも書いたが、「柳樽」におけるそれらの巧みさを左に列べてみよう。

親類が来ると赤子のふたを取り (初篇)

惣領は尺八をふく面らに出来 (同)

簀入の二日は顔を余所に置き (同)

すす掃の孔明は子を抱いて居る (同)

黒犬を桃灯にする雪のみち (同)

はごの子の干物を拾ふあやめふき (同)

熊谷はまだ実の入らぬ首をとり (三)

内談と見へて火鉢へ顔をくべ (五)

右の句は滑稽な句として例に挙げたのであるが、あくまでも「私が見て」ということばを云い添えねばならぬことは前述の説明から明らかである。

物を人間に見たてたり、人間を物に見立てたり、物と物とを比較したり、比喩は色々であるが、そのピタリと動かぬ発見は我我も大いに学ばねばならぬと思う。「柳樽」の比喩は実にピッタリであって、現代の句のように解釈によって色々の意味に取れる、ということでない。この点も学ぶべきことと思うが、これは「柳樽」のモトになった「万句合」の題が「にぎやかなこと／＼」だの「こはい事かな／＼」だの「けっこふな事／＼」だのといふように、意味の広く取れる漠然としたものであったため、付句(つけく)が具体的なものにならざるを得なかったであろう、という事情も考えられる。

ともかくうまい比喩を発見することが、川柳に笑いをもたらし、人人に川柳を愛させる一因であると思うのである。



川柳ゆーもあ特集

— 同人作品 —

(到着順)

税務署は苛めておいて別れに来

倉敷市 野田素身郎

誕生日ほんとは産む気でなかった子
薬用意今夜は酔えぬ役がある

芦屋市 丸川初甫

スキャンダル読んでパーマの時間待ち
シームレスずらしてよれて旅おわる

守口市 羽原静歩

カニスキへ鰻しょんぼりするばかり

岡山市 直原七面山

若返りの薬と聞いて飲みつづけ
不始末の始末を妻にして貰い

岡山市 江国幽谷

野次馬の中の一人に僕もいた

親類と見たか猿から握手に来

大阪市 本多柳志

減反をして豊年の盆踊り

倉敷市 小幡里風

米もソも土足の裏の世界地図

一年を硬貨で折る初詣

大阪市 吉岡美房

肥えましたなあとは遊んでいるみたい

大阪市 有信新之助

載りようもあろうに女と死んで載り
領収書要るかと肚をのぞかれる

大阪市 室谷徹舟

かすり傷位に貞操扱われ

高座から降りればこわい顔になり

岡山市 田村藤波

ボーナスが夫婦喧嘩の種を蒔き

酔眼朦朧隣の家の戸を叩き

高槻市 福田丁路

肥料の効め確かに草が先に伸び

食って寝て役目を知らん顔の大

姫路市 隠岐不酔

年のこと言うまい聞くまい禿同士



外泊へ医者やんわりと釘をさし

奈良県

草深酔升

三日前刑務所を出てまた盗み

島根県

小砂白汀

粗品一つ貰い持たれぬほどに買い
本読もか思えばテレビのボクシング

出雲市

原 独 仙

商店の定休新聞紙つき刺され
高圧線にぎり直してモズの恋

兵庫県

河原みのる

いけ好かぬ奴だが利用価値があり
企業では鬼の社長におんな癖

出雲市

弘 津 柳 慶

ケチンボが喰えばめったに食傷らない
敬老会うす気味悪う手をひかれ

倉敷市

藤 井 春 日

栄転の課長エロ本置いて行き

和歌山県

垂 井 葵 水

仲人をたてて体裁ととのえる
美容院鏡の中へ会釈する

倉敷市

竹 内 翁 童

正直な日記を妻にとがめられ
のど元を過ぎて体調また乱し

岡山県

出 原 敬 一

大スター恩師の前にかしこまり
一枚の地図にハネムーンほほを寄せ

倉吉市

奥 谷 弘 朗

校長も酔えば仲居も浮かれ出し
豚買いと飼主オラのことと揉め

高槻市

若 柳 潮 花

女房が苦手で嘘をよう言わず
ビールでも駄目かと医者にくい下がり

倉敷市

松 下 梁 水

かみそりを逃れた髭を爪で抜き

高槻市

山 田 季 賛

三冊目買うて愛児の名が付かず
気分だけ二十才へおツム承知せず

和歌山県

野村太茂津

お互に話せばわかると話合い
生活がかかっているから馬鹿になり

鳥取県

森 田 布 堂

鳩胸を褒めたがエッチと云う返事
垢抜けのしない芸者が酌ぎにくる

鳥取県

森 田 布 堂



熊本県 有働芳仙

月の石杖へつま先足して見る

尻餅をつく取敢えず苦笑い

倉敷市 水粉千翁

つまみ食い舌と指とのタイミンク

奈良県 石倉旅風

竹原市 森井菁居

特価では返しもならぬ贈り物

表現の自由男のロンクヘア
見ぬ振りが出来て都会に住み馴れる

折りたたみ傘を畳みもせぬ男

名古屋市 吉田水車

東大阪市 竹中綾女

顔いろを見いぬるい酒を酌ぎ

ミニミニの腿に途惑う眼のやり場
ポンコツの山へ野良犬足を挙げ

大阪府 小林トメ子

東大阪市 竹中肖二

リングをもナイフでむけぬ嫁が来た
記念日に古顔ズラリ生きていた

お銚子と枕並べて酔いつづれ
悪友が昨夜の首尾を聞きに来る

大阪府 児島与呂志

神戸市 小浜牧人

娘等の嘘ばれているのに庇う妻
孫入れてくれた紅茶の味を褒め

大阪府 山川阿茶

男の子小さい拳固で義に強し
正札を見てサラリーへ腹を立て

大阪府 山川阿茶

富田林市 浅川八郎

鬼瓦せめて雀と対話する
真夜中に何がお国を何百里

岡山県 坂井三葉

美容院出て来る女のピエロめき
意屈の買手何所に居まへんか

交番の前だけ二人押して行き
大事件巡査を束にして運び

京都市 都倉求芽

久しぶりやなあとえらい奴に見つけられ
きのう右今日は左が佇つカンパ

大阪市 西森花村

八尾市 西尾栞

肥満体に道きかれてる肥満体
とりもちの蠅とはあわれマイホーム

大阪市 西森花村

ラッシュ嬉しまさに唇ふれんとす
今治市 越智一水



頼杖の頬が重たい十二月

大阪市 中川 滋 雀

親と子の勉強の中くい違い
学歴は四年遊んだだけの事

大阪市 天正 千梢

もの足りぬ顔してボヤを見舞れる
あっさりとかぬ押し売りが置き忘れ

岡山市 川端 柳子

まかれてもよい二次会の歩をゆるめ

京都市 松川 杜的

よく肥るたちで秋の風こわし

歩道橋アアおんぼろのわが家知り

呉市 林野 甦光

正装の化粧皺の辺から剝けてくる
ぬるま湯のような顔してプロポーズ

大阪市 西出 一栄

こんな顔はよそうレンズの思いやり

ミス今日も裸を見せる会があり

貝塚市 野坂 つき子

我が娘ならあんな短かいミニ叱り
市場籠今日のおかずは何にしよう

大阪市 本庄 金三

馴染めはラッシュで足をふんでから

頼りない横顔かけがえない夫

竹原市 森井 菁居

父と母どちらへも似ぬあわて者
棒持って歩けばやたら撲ちたがり

藤井寺市 西い わを

飾りものめいてマイカー磨かれる

大阪市 金井 文秋

誕生日くじも一枚買ってみる

大阪市 川口 弘生

硬貨だけが銭と思てる販売機

売上げを何度も数え売れない日

大阪市 宮尾 あいき

遅くなるとマイカー飛ばし遅くなる
マネキンが悪いであたしに似合わない

札幌市 平野 青夜

ポケットの小銭の音で孫を呼び

女性上位男雑の鼻がかけている

島根県 堀江 正朗

思惑が外れて途迷うのも師走
新婚の快味瞬間無我夢中

岡山市 大森 娛句楽

見えぬから天下御免の風呂あがり

東大阪市 久米 奈良子



新薬も煎薬ものみ懐炉抱く
湯加減を問えば老母に歌があり

無心云うときだけ親をたてまつり
二へん目もいま出ましたという出前

どこそこはまだねと歳暮の指を繰る
羽根欠いで音痴となつたきりきりす

片方の下駄片方へ殉死する
子煩惱蟬を逃がして樹から落ち

絵日記が大鯛ほどの鮒を釣り
老妻のおめかし不思議そうに眺め

無念無想お金の音で破られる
正義の味方必ず出るから漫画好き

珍客の裸へアバラも合わせ脱ぎ
松江市

父ちゃんは撃たれる役の西部劇
突然に呼ばれたあくび引っかけ

おたがいにテストする気で来た見合い

高槻市 傍島 静馬

大阪市 西川 誓二

青森市 工藤 甲吉

倉敷市 本田 恵二朗

富田林市 岩田 美代

小松市 四方 天弘美

松江市 中川 晃男

堺市 藤井 一二三

ベルそっと押して言い訳くり返えし

地下鉄に乗っても子供窓に立ち
遺品もう質屋いったりきたりする

イニシアティブ孫に取られて日曜日
ロマンスを赤い甚平を着て語り

乗り越しをする夜汽車とは知らず乗り
岡山県 浜田 久米雄

齢ばれて老人組みへ入れられる
パジャマ着ると女逆立ちしたくなり

味の変らんうちに仏壇から下げる
大阪府 河井 庸佑

電車ごっこみな急行になりたがり
乗車券機械で買うて乗りおくれ

肘てつをくらいすすきりして帰る
齒ぶらしを啜えたままで首振られ

薬局へ来てから薬の名を忘れ
お笑い台本執筆
死の五分前そんな顔です執筆中

富田林市 藤岡 花梢

神戸市 仲 どんたく

大阪府 大坂 形水

大阪府 菊沢 小松園

大阪府 河井 庸佑

堺市 河内 天笑

大阪府 不二田 一三夫

川柳五十三次 (五)

富士野鞍馬

4 程ヶ谷

程ヶ谷は、神奈川から一里九町(四・九キロ)。現在は横浜市内になっている。

一九の「膝栗毛」に、

おとまりはよい程が谷とめ女

戸塚まてははなさざりけり

とあり、やはり宿場の女がいたようで、川柳にも、

程ヶ谷は戸塚の夜を抱留める (武一四〇)

と詠まれている。たいていは、江戸を出て第一夜は戸塚泊りとなるのが普通であるが、それを程が谷で引き留めるということもありがちのことであつたであろう。

風により梅は程ヶ谷迄匂ひ 麦仕(七八三)

この梅は、程ヶ谷駅から一里 (三・九キロ) ほど東方、杉田村の梅で「江戸歳事記」

に、

「民家の園中、又畑中に多し。この地は海

浜に望み、左に浦賀、右に本牧の端、房総

の山々一望に看わたされて勝景の地なり」とあり、なお、

春南問はずに曲る杉田道 三朝(一三二)

杉田道ふくいくとする春の旅

田舎には杉田花だと梅をほめ

海月(八八五)

高島の海までかほる古梅園

元佐(三七七)

3 神奈川

神奈川は川崎から二里半(九・八キロ)。

今の横浜市神奈川区である。昔はゆるい丘陵地帯で、ここに台の町の料亭が軒をならべて

いて、街路の下まで海が入りこんでいた。

一九の「膝栗毛」に

「金川の台に来る。ここは片側に茶屋軒を

ならべ、いずれも座敷二階造り、欄干つき

の廊下かけはしなどわたして、浪うちぎわ

の景色いたってよし。」

と書かれて、豊国の絵には、「さくらや」と

いう宿屋もあって、その裏は海で、二階から

女が遠眼鏡を覗いている図が描かれてある。

次のような川柳が詠まれ、

河竹の神奈川へ来て年がなし

(武一一四)

神奈川台を見る図もある。

神奈川台を見る図もある。

神奈川や海から上るはやり歌 (武八七)
神奈川の客は大かた風できれ (三五)
かな川へ大きなちよぎでかいに来る (安九天上)
神奈川は伝馬でくるがためになり (六三)
船着場でもあつたので、舟人相手の飯盛が居たようである。また、
神奈川の文は鯉の片だより (初22)
と、鯉がとれたので、江戸へもよく送られたと見える。なお、
めめちちよの神奈川にある咲耶姫

木質(四〇26)

という句があるが、神奈川駅の南、芝生村

に、浅間神社があつて、そこに「富士の人

穴」というのがあり、富士山の穴まで抜けて

いるといわれていた。広重の絵に、ここから

神奈川台を見る図もある。

二豊(二一九三)
本牧のはなへ杉田の梅かほる

花岡(六〇一七)

名台の梅東海へ香を配り 三箱(二二二二)

等、川柳狂句に詠まれている。

5 戸 塚

一九の狂歌に、

玉くしげふたつにわかる国境

所かはればしな坂より

と詠まれ、「江戸名所図会」には、

「品野坂。或いは信濃又科野に作る。俗に権太坂と呼べり。この地は武相の国界たり。坂路の両傍には、蒼松の老樹左右に森列たり。坂の上にて右を望めば、芙蓉の白

峯玉をけづるが如く、左を見れば鎌倉の遠山翠黛濃やかにして、実にこの地の風光また一奇観と称すべし。」

とあり、街道の畔に国境を標示する杭が立っていて、これを「境木(さかいぎ)」といった。

その南が品野坂で、それを越えると戸塚宿である。程が谷から二里九町(八・八キロ)

品野坂に続いて、やきもち坂があるので、川柳は、

焼餅坂にさせ好な国境イ 古丸(六二八)

と相模女をよんでいる。

佐野の馬戸塚の坂で二度ころび(拾五七)

佐野源左衛門が、瘦馬に乗って鎌倉へ馳せつける途中ころんだのは、この二つの坂であろうか。

日本橋から十里(三九・三キロ) 丁度一日の行程で、ここで泊るのが通例で、

戸塚だと思った晩にとつかまり(二〇六)

弥次、喜多も泊っている。

戸塚から五文で来たと御用いひ(八二五)

「御用」は酒屋の丁稚で、戸塚から江戸まで、五文しかつかわずにやって来たというのであろう。

広重の絵には、「こめや」と書いた看板のある茶店と、「左りかまくら道」とした道路標が描かれてある。この「米屋」は現存している。ここから鎌倉へ二里(七・九キロ)である。戸塚を過ぎると、有名な八丁並木を通る。

雑 感

神 谷 凡 九 郎

もう何年前になるだろうが、市民成人講座「川柳」に何と云う気もなく飛び込んだ僕にグサリと飛び刺さった一言―古方先生からお聞きした路郎師の「川柳は人間陶冶の詩である」であった。コリヤ大変なもんやと、先ず思った。漫画川柳(素文画)昔の雑誌でよく見た面白おかし十七文字が川柳じゃないかと思っていた私にはショックだった。

紋太先生の「川柳は人間である」と云う言

葉に触れて、いよいよ、川柳は大変なものだとの考えを深め、今もその考えから離れないものになっている。トメモとても、川柳は遊びだなんて決して思えない。

一字止がいけない。定型でなければならぬ等々云われては居るが、庶民大衆のかざらない心をうたう川柳はもつとノビヤカなものであってほしいし、僕には路郎師が云っていられた十七音字説が好きであり、一番ピッタリする。日本人好みの七五調の音域が好きで自分の句も読んで見てその調子にあえばあまり字余り字たらずにこだわらない。

華美華麗な心の歌が好きなら和歌を、人間

を伏せて風物に託すようなのが好きならば俳句を作られたらよいと思う。―私は共に遊びであると思っている―和歌も俳句も素通りした門外漢的知識しか持つていない私こそがこう言うような事を云う事は失礼以下の何ものでもないでしょう―馬鹿につける葉はない、ホットケ、ホットケと一笑にさえ値いしないものと心ゆたかな歌人、俳人諸氏は多分お許し下さる事でしょう。しかし、そう思っている僕を僕自身どうしようもない。ナラお前は、川柳をどう思っているんだいと問われそうなので、所謂、「云いたいこと云ってラ」
としてお聞きながし下さい。

九輪抄

菊沢小松園選

太陽にすまぬ影がちちこまり

大阪市 白石 良圭

くすり売るにもタレントの要る世なり

八尾市 飯田 一治

マンジュシヤゲ炎えて果敢ない片思い

守口市 羽原 静歩

主婦連の作戦次は何をする

大阪市 吉岡 美房

否定する形に歪む壺の花

大阪市 正本 水客

島の灯海の灯橋の灯息つめて生きている

和歌山県 高岸 桐蔭

老の身に豊作蜜柑重からず

倉敷市 小幡 里風

我が影を真下に踏んで銭のこと

岡山県 武内 雅堂

点滴のような女で離れない

大阪市 有信新之助

銀行の画報で真相ひとつ知り

大洲市 堀内 暁風

雨だれのリズムへ孤独かみしめる

竹原市 時広 一路

のんびりと歩けば見向きもしてくれず

羽咋市 三宅 ろ亭

戸を開けるコツを覚えて猫は入り

大阪市 木村 水洞

公害を出すほどあがる社の黒字

和歌山市 垂井千寿子

病癒えて生活の灯にまた浸り

和歌山市 垂井 葵水

笠岡市 木山 遠二

大物へ俺の怒りが届かない

大阪市 橋高 薫風

鳴呼清水白柳さん 二句

大輪のぐわらりと菊の散りざまや

菊の香よ親切心は引継がん

京都市 山本 峠

この街のどこかにぼくの夢がある

官能のたかぶりを消す風は冬

大阪市 阪上十止庵

イヤリング愉しきことをきかぬ身に

酒煙草やめよといわず妻も老い

大阪市 中川 滋雀

バックミラー過去に追われる窓となる

だし雑魚の絞りきられた目がきれい

富田林市 岩田 美代

永遠に消える事なし明日を待つ

すぐ逃げる鳥の青さを確める

東大阪市 落合 思月

愛情だけで食えないことに今気付き

公害は空から海からお米から

守口市 野呂 杜月

人間の群からはみ出し相な日も

一点を見つめ過ぎてた過去もあり

今治市 月原 宵明

生きているしるし正しく排泄す

倉敷市 水粉 千翁

空間に闘う女対女

岡山県 三輪 康明

唇乾く夜に疑いの眼を閉じる

大阪市 今西 章雅

外出すぎだんだん柄が派手になる

鳥取市 近藤 秋星

秋はよし菊のテンブラとは嬉し

神戸市 仲どんたく

ピルの谷タバコ屋孤暈守のごとく

小松市 四方天弘美

お許しを願う句集が後を追

岡山県 直原七面山

ハッピーエンドそんな恋ならし見たし

豊中市 戸田 古方

自画像に睨まれながら対座する

松江市 柳楽 鶴丸

二十二時以降楽しい二人の時間です

八尾市 香川 酔々

片思いししみ逆は真ならず

桜井市 岩本雀踊子

ふところ手自分に恃む他なくと
 岡山県 出原 敬一
 世話焼きに俺の倅わせ振りを尋き
 和歌山市 秋月 宏方
 やけくそのようにブルドーザー動き
 羽曳野市 麻野 幽玄
 ご機嫌が悪いか庭を丸う掃き
 大阪市 平井 露芳
 くさいものには蓋ではニンニク効いて来ず
 札幌市 平野 青夜
 不二の山描けば日本の景となり
 鳥根県 小砂 白汀
 カセットにしてエリート組みこまれ
 愛媛県 渡辺 暁童
 分譲地父祖伝来のものならず
 倉敷市 竹内 翁童
 情熱が去れば十人並の人となり
 下関市 桜川 不水
 目ん玉が太すぎトンボ誤魔化され
 倉敷市 小野 克枝
 前向きの歩を運命のはかりごと
 青森市 工藤 甲吉
 ふり向けば我が足跡のなにも無し
 広島県 南条 露声
 うるたえた分だけみかん落して来
 鳥根県 榊原 秀子
 感謝する心忘れて灯に溶けず
 鳥取県 両川 洋々
 酒グセの悪さを自分でも想い
 大阪市 桑原 千里

寝ぬ覚悟時計も妻も頼りなし
 岸和田市 福浦 勝晴
 利食いする甘い話にしてやられ
 岡山市 川端 柳子
 紫の袂そよいで霧に消え
 竹原市 森井 菁居
 爪が無い蟹へ子供のためらわす
 竹原市 生信 笑子
 鶴折って飛ばそう退院は間近か
 倉吉市 奥谷 弘朗
 小役人口ほどにない肩の巾
 岡山市 山田 止水
 人様の財布も知らず買えと言う
 伊丹市 小川静観堂
 冬近き廂へ仔犬の小屋を建て
 大阪市 西川 誓二
 あれきりの縁の人が胸に浮く
 鳥取県 川崎 秋女
 どう生きてゆけばと日記に問うて見る
 姫路市 村上 春巳
 カナリヤの夫婦へ子無しが気をつかい
 東大阪市 久米奈良子
 反古山に積んでも真の字に逢えず
 熊本県 有働 芳仙
 株少し持って相場をのぞく首
 大阪市 宮尾あいき
 この花の為に生るか冬の蝶
 大阪市 宮地 双楽
 雲水の心で雑役範をたれ
 大阪市 本庄 金三

おさらえの根々へ先斗町陽が高し
 藤井寺市 西 いわを
 重宝な舌よ思わぬ嘘をつく
 東大阪市 竹中 綾女
 孫が来て連休子守で済んじまい
 出雲市 原 独仙
 来年へ持ち越す理髪師の頭
 大阪市 西出 一栄
 割り切れぬ性質に生れて損ばかり
 大阪市 小谷 葉子
 オブラート包んだ嘘は風にのり

みんなの暮しが明るくなる
セキスイのプラスチック

積水化学
 本社 大阪市北区足尾町1



同人特集

亥年の川柳人

順不同

亥年の性格

大阪市 金井 文秋

「手を見る」場合もあるのである。亥年の方々、易にでている短所を改め、長所をのばして幸福になろうではありませんか。おみくじに歩きかたまで変えさせられ 方大

亥年の長所と短所

倉敷市 田垣 方大

易書によると亥年生まれの人、長所は、忍耐強く卒直果断、青竹を割ったような爽快な気性であるが、短所は一時の感情に走って、理非曲直も見きわまえずに怒る、云々となっている。

一年間に大勢の人が生まれるが、千差万別のそれぞれの父母の性格を受けて生まれ育った人々が、同じ年に生まれたからといって、冒頭に書いたように、おしなべて同一の性格になるものであろうか。このような疑問をもつのは私だけではないだろう。然し人には弱いか強いかの差はあるが、いろいろの面をもっているものである。亥年でも悠然としている人もあるが、その

反面事と次第によつては猪突猛進する場合もある、というわけである。それ人間は他からの働きかけがかなり影響するものである。「彼奴はやれる人間だ」というような言を始終聞かされていると、本人もやれる人間になつてくるから不思議である。またその逆の場合もあり自信をなくし、しよげかえるのである。

亥年の人が全部卒直果断型である筈がないのであるが、亥年生れの人には卒直果断であるのと聞かされ読まされていると、そうでない性格の人でも、大なり小なりその傾向のある人間は、その気になり、またそのような質的なものが、表面に大きく出てくるものであると

思う。人間は誰でも幸福をねがい、良い人でありたいと思うものである。幸福になるためには皆々として働き、良い人になるためには種々な修養が必要であることはいうまでもないが人間の弱さというものは「働けど働けど」の歌にもあるとおり、幸福になるためには「じ

猪突猛進と云う言葉がある。猪のように向う見ずに進む事だそうだが、これが亥年生まれの気性にすべて当てはまるとは思えない。云いだしたら周囲から何んぞと云われようとも言分はどうしても通すと云う強いものは持っているようだが、どちらかと云うと、熟考に熟考を重ねた上でないと物事をやらない臆病さを持っている。これも猪の持つ性格の一つかもしれない。

若さとは悔多かりし勇み足

これは私の実感ではなく、理想の句であるといいたい。勇み足になくてもよい、それ位の勇気が欲しいといくら思った事か。

どうも私に憑いた猪は温和で気が弱く、正直の上に馬鹿がつくらしい。だからこそ借りたのは返えし貸したはよう取らず貸している方が素通りする弱氣で損ばかりしている。

亥年生れの者は意志強く、独立の気概に富み、人の意見を用いず、百折不撓事に當る。それだけに苦勞も多い。福縁な運氣故晩年は

よい。と曆に書いてある。

意志の方は強いとも云えるし弱いとも云える。ただ生甲斐のある仕事に当れば強い方に傾む事は確かだ。独立の気概の方は、人に使われるのが嫌だからそうならざるを得ない。人の意見は依怙地にならない限りよく聞く方だと思っている。百折不撓の気持はあるが、あせるより嫌気がさして来た斜陽で情けないと思っている。

苦勞の多いのは浮世の常だが、せめて晩年はよいと云う運勢だけでも当ってほしいと、願っている。

朝の禪寺

岡山市 江国 幽谷

色づいたみかんが木々の間に匂い柿が光る、落葉焚く煙が夕もやに流れるころ、私は幼少の雪舟がいた宝福寺をたずねた。

禪寺の夜は般若心経の看経と寂びた鳴物のなかに沈んでいった。午前四時に起床の合図の鈴鐘が鳴る、堂衆はすでに洗面を終えて法堂に入っている。私は朝課誦經の始まった堂内の空気を騒がせないように静かに入った。知っているお経もある、私は低く和した喧騒と繁忙に追われるような生活をしている都会人のざわつく気分は何と和らぎを与えてくれることであろうか。それから六時までが暁天の坐禪である。明けをめるしじまのなかにそ

よともゆれぬ坐像が見える、これみな人である。

法にのっとった粥座ののち裏山に上って青空を仰いだ、寺では掃除が始まっている得がたい朝だった。

本降りと見て蝸牛動き出し

私も病気を征服しようとするこの寺に足を運んでいます。

次のことを聞く、われわれの使っている日常のコトバには面白くうけとることのできるものがある。その一例、働くと云う字ではなくコトバを別の字に直すと「傍」(はた)と「案」(らん)となる。傍の者をらくにする。周囲の人々を安楽にする。

キリスト教のように隣人愛などと堅苦しくいわなくても働くことの意味がよくわかる。

これは信仰を大衆のものにする説き方である。私は字を別の字に、別のコトバに直して見るのです。

亥年と私

大阪市 浜畑 胡蝶

「大正十二年三月一日」これは亥年生まれである。私の生年月日である。然しながら戸籍には明記されていても実際は十一年十月戌年生まれと云ういささか滑稽な過去を持つ私は何だかこの世に取り残された者の悲哀すら

覚えるものである。

「盛ちゃんはおうちの子とおない年やなのに一年若いとはどうなったんやろ」親戚に当る叔母が先ず不思議がった。「何云ってんねん早生まれで学校が七つ行きやさかい叔母ちゃんが錯覚してるんや」とやり返すとくだんの叔母はどうも納得がいきかねるとばかりの表情を見せたが、私は両親から種明しの言葉はよく聞いていた。

その頃私の家では改姓の手続きを村役場に出していた。途中で私が出来たのだが、その届出もされず改姓してからとの事で約五カ月はほったかされていたのである。

その頃でも法律違反なるものはあったと思うが、その点どうなったか両親からまだ聞かされてない。

五カ月の間に年が変った為、過去に於て悲喜ごもごな事もあったが今更両親を恨む気も毛頭ないし自分としてもたえ一才とは云え若い方が良いので正直な処、満足し切っていると云えよう。でもどう云うものか亥年生まれを地で行く猪突猛進的な性質を持ち合わせているのは自分ながら不思議でならない。一旦こう思ったら見さかいかもなく突進してつい不覚をとった事も過去に何度かあった。

今年も又十二年ぶりでおとすれるおらが年がやって来た。既にシンボルであるべき牙も抜けてはやや落目だが再度のめぐり合わせはないかも知れないおらが年に異常なフアイトを持っているのは確かだ。

おらが年アレヨアレヨで済まされず

思い出

大阪市 太田 良子

大正十二年七月十二日亥年の生まれ。「なんで編集部が私の年を知ってはったんやろ」そんな事を考えながら柳歴だけが長いその当初を思い出してみた。

昭和二十年学校卒業と同時に大阪通信病院眼科に入局した。終戦直後の混乱した世の中にあつて、然も病氣と取組んでいる毎日では何か他に心の糧となるものが欲しかった。俳句もした。看護婦さんと一緒にお茶、お花もした。それ等の中にあつて推められるままに川柳の門をくぐった。

月一回の句会ではあるが当初は仲々作句出来ず「今日はさぼろうかな」と思っている矢先「今日は句会やで」ときまつて顔を出されるのが耳鼻科の故尾崎方正先生。そうなる帰る事も出来ず昼食もそこそこに作句に没頭したものだ。そうして路郎先生の御人格に触れた事と合わせて川柳が身近かな所から句材が拾えて批判、反省が出来、決して滑稽や穿ちばかりでは無い事を知り、親しみを喜び覚えた。これも励まして下さった方正先生のお蔭である。先生を詠んだ拙句に

だるまさんに手足をつけて医長殿「路郎先生選」。病院の句会花やかなりし頃は方正会

長、仲谷ハナ子女史、市場没食子薬局長、若林草右内科医長、足立春雄産婦人科医長、その他水谷竹荘、森下愛論、西辻竹青等の皆さんがいた。三十二年には不朽洞会から句集「私連」が出版され感謝した。

最後に路郎、葎乃先生には大変お世話になった。葎乃先生とは日本舞踊のお稽古も御一緒した。家が近くだったせいもあつて、その時々親しさの余り今にして思えば失礼な数々の思い出を残している。

それなのに御無沙汰ばかりしていて全く申訳がない。このように様々な事柄や人々が走馬燈の様に浮かんで来て感慨無量であるが、これも何か書けとおっしゃって下さった編集部のお蔭だと感謝している。

亥年 異変

松江市 岡崎 祥月

明治の末期に生まれ九才までは何不自由なく育った。だが人生は甘くない。九才の夏市役所の吏員だった父に死別し我が家にぼつんと穴があいた。

姉と一回りちがいの二人だったので我儘に育った私だったが、柱が折れてからは売食い生活と急変し十四才で丁稚奉公をする身となった。まだ当時は自動車もハイヤーが数台よりなかつたのでトラックもないので荷物は八

八車に山と積んで駅や汽船場へ持って行かなければならなかつた。

厚司に角帯をしめて毎日苦勞にたえた。生活がかかって居ると思うと主人や先輩の言われるままに働いた。

大正十四年の春、今は川柳を遠ざかっていた梶谷柳人君等と川柳に手を染めてからは亥年の気性に似ぬ性格となつた。丁稚奉公をしてはじめて地位に入選した句。

「棧橋を投げた荷物を振り返り」という句が何時までも記憶に残っている。その後川柳雑誌社松江支部を設立し七八名でささやかな会も開き三代目の支部幹事となつてからは川柳即ち生活と変つた。

大正の末期大病を患い天理教の先生に助けられ教祖親様の訓えの「馬鹿は阿呆を喜ぶ」のまま生きぬき和を以て人に接し馬鹿になり切つて川柳と信仰に生甲斐をもつて下積みのまま定年を五度も蹴つて老いの身に鞭打っている。

「石橋を叩く亥年の人生路」

亥年 生まれ

岸和田市 高橋 操子

亥年生まれの人には負けん気が強くて、人の意見をきかず向う意気が強く苦勞性であるが反面世話好きで、人にたよりにされ正直な人が多いと世間では言われています。

六十年の自分をふり返って、成程ねエーと
思う事が多いのです。物事をやりかけると真
つすぐ一筋にそれはそれは真面目に荒波も平
気で屈せずやり通す根性、人の悲しみよこ
びは我事のように思い、出来るだけ尽した心
心、亥年生まれの人には共通したのが大好
持っていますので、私亥年生まれの人が大好
きです。いろんな失敗や苦勞がありましたが大
思う存分に働けたよるこびが残り悔はありま
せん。

きさ子さんがいつか操子はんはすぐ人を信
じてしまうよってヒヤヒヤする。人にはつき
合ってみたい、馬には乗ってみたいと云う言葉が
あると忠告してくれた事があります。ほんと
に其の通りで、何のうたがいてもなく人を信用
してしまふのです。失敗をくり返しながらい
まだに直りませんが、失敗さす方が悪くて
された方がまだよい等と反省する心を持たな
いのです。これが亥年生まれの負けん気です
ようね。直そうと思ってもなおらないこの根
性、好い時もあれば悪い時もあり、これでい
いんじやあなかるうかと思っています。

心配をするなど亥年腹を決め 操子

亥年の生まれ

兵庫県 小浜 牧人

古くとも僕には仁義礼智信

路 郎

元日の朝は騒音も嘘のように静まり返って

いる。早朝の冷氣を胸一杯に吸って座に着い
た時、年頭の心は白紙のような爽やかさを覚
えるのである。そして其の改つた心の中へ冒
頭の路郎先生の句が浮かんでくる。句にある
お心の一端を白紙になっている元朝の自分
心へ泌み込ませて人生への厳肅な教訓を深く
肝に銘じて新しい年を生きる指針にせんと誓
うのである。

明治四十四年九月生まれの私は今年五度目
の当り年を迎えた訳である。僅か十カ月では
あるが、明治の風を吸って生じ立った最も若
い明治人間である。今日古いか頑固とか兎
角敬遠され勝ちであるけれど、私は過去の日
本の一時代を築き上げた明治人の「偉さ」に
敬意を持ち明治人である自覚に誇りを持って
いる。

亥年生まれは猪突猛進、外剛内柔気の弱い
くせに強がると云うのが一般である。私もこ
んな性格そのままの亥年男であった。若い頃
はラグビーに熱中し甲子園や花園グラウンド
を存分に猪突猛進した。戦地へは出なかつた
が、物めは資材部に在籍して戦中戦後の混乱
期の物資調達には随分無類な猛進を重ねたも
のである。遂に猪突倒れる如く私も引っくり
返って仕舞った。めくら減法に強引に突っ走
った結果であった。

「一と休み一と休みして片肺の」

後悔の自嘲である。以来長い闘病につづく
療養の生活を余儀なくされている。もう無理
の利かない身体。当り年の幸運を期待して小
旅行でもしてみたいと考えている。

地図と一緒に夢を畳めり

薫風

豚になった猪

大阪市 宮尾あいき

私の母の里方にとても頭の切れる伯父がい
ました。その伯父が私と同じ亥年だと云う事
が幼心にもとても嬉しく、誇りに思われた事
でした。

養子娘で亥の年、さぞかし夫を尻に敷いて
いる事とお思いでしょうが、暴君の夫に上手
に飼育され、思も取られ、豚になり下つた事
を我ながら情のう思っています。

亥年のせいにか子沢山で我ながら豚みたいだ
と思います。

何でもやりかけた事を、中途で止めるのは
大嫌い、人の忠告は心よく聞きますが先ず自
分の意見を通してからと云うのが猪突猛進に
つながる事かもしれません。但し貯金は挫折
してはばかり。

先日末っ娘にボーイフレンドを紹介されま
した。

「優しくて親切でお人好で世話すきで、そ
して少しオッチョコチョイで偏屈で、お母さ
んに良く似ていると思つたらあの亥の年
よ」

末っ娘にまるで自分の性格を云い当られた
ように思われて面はゆい気持が致しました。
総領に気兼ねする程多く産み あいき

課 題 吟

百円をくずし一灯のお賽銭
賽銭もさびし雨降る秋祭り
逆境を賽銭投げて幸たのみ
信心の頭を賽銭かすめ飛ぶ
千円の御賽銭とは案じられ
賽銭に聖徳太子も放り込まれ
お賽銭あげましたよと鈴鳴らし
国宝と同じ賽銭箱のつや
賽銭と願ごとくに開く距離

佳

賽銭の威力努力もさりながら
賽銭は昭和元禄ほどでなし
人間の欲がおかしいお賽銭
かぶりつきで賽銭投げる宵戎
賽銭を投げて心の憂も投げ
賽銭の音は自分に聞かず音
賽銭を投げる手つきへ職が出る
本殿が見えて賽銭握り替え
抱き上げて賽銭箱の底を見せ

軸

最 高

大西八歩選

金賞の栄に輝く菊花展 軒太楼

最高にめかして出かける参観日
最高の人出へ鳥居まで押され
最高の値段へチリも積つてる
コマーシャルみな最高の品にする
最高の童顔で撮る受勲の日
家計簿も最高と云う十二月
最高の人出へ万博幕を閉じ
交通事故死毎年最高数更新
最高のしあわせという夫婦仲
割引かれていいる最高とは知らず
最高点目なしだるまに手がある
最高の女と思えた日もありき
冬山に日の丸揚つた最高峰
最高も最低もいる楽屋裏
最高裁までは双方諦めず
友と酌む酔い最高のよさこいか
ウインドの最高品へみんなの目
最高の榮譽に内助も写される
最高の幸せ妻も子も元氣
最高も色々あって県下一
最高の伴侶だったと墓に告げ
最高の行楽人出テレビで見
朝焼けの名峰富士へ手を合せ
小企業学歴最高短大出
年賀状最高二百へならばされ
最高の見せ場に代打三振し
悦楽を極めた後の虚しさよ
事故最高標語はついに役立たず
最高のすき焼夕餉の笑い声
最高の気分新車を乗り廻し
最高の人出に秋のフィナーレ

花子 魚山 千翁 暁明 どんたく 初甫 初甫 章雅 祥月 雀踊子 素身郎 一治 静歩 思月 寛風 暁風 輝親 松花 国彦 一郎 代仕男 暁童 英子 翁童 緑 十止庵 秀峰 不二 峠

家中の年を合わせたお祖父ちゃん
最高の幸せ五体揃つた児が生れ
最高に御氣嫌父ののろげが出
最高に効くとすえさす土用灸
最高の人出へ張り切る観光地
最高点取つてテストへ湧く自信
逝つてから最高だった父を知り

佳

最高と云う宣伝にまどわされ
風呂好きの母へ温泉の湯がこぼれ
最高を着てむなさにいうモデル
お隣りにまで百点を見せに行き
最高の喜び一歩児が歩き
最高は事故死をしるという保険
最高の味みそ汁の朝の膳
潮時を見て司会者乾盃し
最高の演技を汚れ役でみせ
最高に事が運んだ酒の味
最高はやっぱり不労所得です
最高と最低同居する心

若本多久志著

「親ごころ・子心」

実費二〇〇円 送料六五円

「老いの坂」

実費四五〇円 送料七〇円

初歩教室

— 題「新」 —

本田恵二郎

新しい生命お爺ちゃんの宝にて 静観堂

ご自分の体験と心境とを卒直に述べたもの
特に名句とは言えぬが、共感を誘うであらう
句である。私への投句で、宝という一字が、
室（即ち部屋）となつていた為め、私はこの
句の解釈に、随分と困らされたところ、
その投句を追いかけたように訂正が無い込ん
で、室は宝の誤りだったので、やれやれと胸
をなでたものだ。短文芸に於ける、たつた一
字が如何に重要な役目を持っているかを痛感
させられたが、皆んな心すべきであらう。

つきつきと新語明治を困らせる 春海
消費者の強腰に負け新価格 花子
天下とつた顔で新車の乗り心地 瑞枝
外型が出来て悔んでいる月賦 金子
外出の度に新ビル街を替え 富士
新企業に他社のエリート狙われる 比呂路
お茶汲でないとかふくれる新入社 濁水
新しい頭に欠けた人間味 双楽
新玉の年の始めに事故死百 千夏

新しい道徳などと身を汚し 満津子
以上の十句は、それぞれに時代相をとらえた
ものである。二十年、三十年先の時代には
どう変化するのであろうか。その時代にな
ると、これ等の句は、歴史を物語るものとな
るかも知れぬ。時事吟ではなくて、時代吟と呼
ぶべき句であらう。句の生年月日を附して、
残しておくことを忘れてはならない。

新妻の笑くぼ売上げ倍にする 露杖
新世帯エプロン姿のお人形さん 洋敏
亡き母を偲ぶおもいの日日新た 誓二
新玉の良き姑佳き嫁善き夫 近江
味噌汁の味定まらぬ新世帯 一三三
実家の味でもないし、婚家の味でもないし、
朝毎に違つた味である。いづれ独自の味を創
作するであらうと思うとほお笑ましい。

新任の課長キャンブル判る人 杜月
そして縄のれんの味も知つてござる。
新新手と商魂にあけくたり。 三十四
そして儲かつたり、損をしきれり。
停年から新聞だけの知恵となり 和風
川柳人は、こうはならないよ。そしていつも
若々しくて、健康だよ。君もその一人だ。

無所属新選挙の度にそう書かれ 万竿
まんまと皮肉つた。痛快なる一句だよ。
新米とけなし新進とおだてあげ 万竿
新築の一と部屋畳にする孝行 志津
新米は客より店主へ気を使い 軒太楼
新米の心理をうまくとらえ表現したよ。
新しいうちはせつせと磨かれる 軒太楼
右左新旧岐路に立ちすくみ 双楽

百姓の幸せ新米噛みしめる 藤持
新しい生命たくまし乳さぐる 佐知子
母性ならではの一句、好ましく尊い。
越して来た姉さんかぶり新婦らし 佐知子
新世帯アパートへ荷が大きい過ぎ 正直
新人のアツという間に出ては消え 綾女
転勤が新築の家見捨てさせ 賛平
新世帯母の叱言がいま判り 一登
新字がついて値段が高うなり 為二
新しい門出へしつけ糸を抜く シゲ
新妻の料理ノートと首つ引き 弘生
新人のフアイトにしてし釣りこまれ 弘生
宿帳へ新婦は小さい文字で添え 新之助
新装開店旦那のできた妓によれば まさひろ
新聞に特種のない平和な日 まさひろ
定年がせまり新年よろこべず 翁童
長男の嫁が新風吹いてくれ 仲美
新語辞典まだ老いばれてたまるかい 仲美
新旧をどこで合わすか嫁姑 久子
新調の服が気になるランデブー 茶々坊
新しいうちだけ大事に乗り廻し 繁子
新築へ故郷の母をよぶ間取り 三十四
新しいものが嫌いで骨董屋 生仏
新しい噂へなびく街の風 孝華
新豊古びるように妻古び 静子
新世帯家は古いが楽しそう 秀村
玉砂利を踏んで新春初詣 隼人

自分のやった行動を、そのまま報告したり、
説明しただけでは、句として成立しない。
玉砂利を踏むという行動は、即ち神詣を意味
している。初詣ということは、即ち新春にや

る行動である。してみるとこの一句、意味の重複のあることを気付くであろう。それに気付いたなら、表現の練り直しを計らなければならぬ。そこに楽しさがひそんでいる。私なら次の如く表現して、説明調を脱出し、且つ句の中に気持ちをはくませることを計る

であろう。佳句ならずとも、一応句を成立させることに努めて欲しい。
(玉砂利を踏めば新春の音がする)
句は、平明であるが、平板ではないけないということを銘記すべしと、本教室の仲間一同へ進言すると共に、今年もご健康で、川柳街

道を潤歩されることを祈る。

題―進―一月二十日締切(三月号発表)
宛先・岡山県倉敷市下津井三五二―七二―
本 田 恵 二 朗

大 萬 川 柳

「急 所」

入選発表

選者 中島生々庵

投句総数 四百十七句

入選 六十七句

急所だけ押えて好きなようにさせ

釘一本大工が打って揺れが止み

盛り上り昔の急所ばらされる

急所押えて議事をまとめあげ

急所突く毒舌が居て事決り

断われぬ急所を知ってきた頼み

体面を保つ急所は避けてくれ

衆寡敵せず急所衝いただけ

飲まし甲斐ないが握られる弱味

上役の急所を衝いてから落目

お互の急所に触れず妥協する

急所突くメモヘ眼鏡をやおら出し

急所突く構えで定刻前に坐し

急所知られて主客転倒し

ばれてたか急所突かれた高笑い

友情の鞭は急所を容赦せず

毒舌も急所に触れぬ思いやり

なまじっか急所覚えて恐くなり

急所を知らず鯉にあなどられ

人生の急所つかめぬままに老い

女房へ急所あずけている平和

愛の鞭急所に痛いほど刺さり

突いていたつもり急所はずれず

何気なく云った言葉が急所とは

温情は急所外して叱りつけ

大物の急所を突けばもみ消され

噂また秘めた急所へふれたがり

ライバルに急所つかれてから落目

急所だけ教え職人まかされる

貧乏をして急所まで見つけられ

本筋で急所に触れぬもどかしさ

ライバルの急所いらいらして探し

急所には触れないほどに釘をさし

黙認のふりして急所だけは締め

他人から亭主の急所授けられ

そっとしておやりと急所には触ず

わざと急所すこしはずし皮肉

その時は急所と知らず打った石

二次会になって急所に触れてくる

急所突いておいて盃差しのべる

八方破れの急所なかなかつかま

急所とも知らずひと言多い妻

ご機嫌を直す急所が秘書にあり

お互いの急所を知ってむつまじい

口べたが口ふるわせている急所

地ノ句

さも急所突かれたような振りをも

天ノ句

ぼちぼちと急所に触れてきたも手

四十五年度

ベストテン決定

河内 天笑 三二、〇 堺

正本 水客 二八、〇 大阪

八木 千代 二四、〇 米子

川村 好郎 二四、〇 高石

山本 素郎 二三、〇 堺

白井 三林坊 一九、五 倉敷

高杉 鬼遊 一九、〇 八尾

野田 素水 一八、五 倉敷

谷井 扇水 一七、〇 倉敷

本田 惠二朗 一七、〇 倉敷

藤井 二三 一六、五 堺

遠山 可住 一六、〇 篠山

小幡 里風 一五、五 倉敷

傍島 静馬 一五、五 高槻

藤岡 花梢 一五、五 富田林

- 一六 笠原 吸江 一五、五 藤井寺
- 一七 米沢 曉明 一四、五 大州
- 一八 本多 柳志 一四、五 宝塚
- 一九 中村ゆきをを 一三、五 大阪
- 二〇 吉岡 美房 一三、五 大阪
- 二一 有信新之助 一三、〇 大阪
- 二二 月原 宵明 一三、〇 大阪
- 二三 堀江 芳好 一三、〇 大阪
- 二四 谷垣 史好 一三、〇 大阪
- 二五 水粉 千翁 一〇、〇 倉敷
- 二六 香川 酔々 一〇、五 尾
- 二七 市川 鱈魚 一〇、〇 岐阜
- 二八 吉岡 青香 一〇、〇 早
- 二九 中谷 利美 一〇、〇 崎
- 三〇 船木 史朗 一〇、〇 代
- 三一 菊沢小松園 一〇、〇 大阪

年間投句者総数 百五十三名
以下略

特別賞
梅里賞 河内 天笑氏
準梅里賞 正本 水客氏
敢斗賞 藤井一二三氏

昭和四十六年度第二回
「胃」 五句以内
締切 一月二十日
第三回 「引き継ぎ」五句以内
締切 二月二十日

投句先
大阪市南区鯉谷仲之町二〇
郵便番号 五四二
川柳塔社大萬川柳係
第十七回大萬川柳大会
日 時 昭和四十六年二月二十一日(日) 十二時半

会場 割烹 大萬(故松江梅里宅)大阪市阿倍野区松崎町三丁目
会費 二百円(大会句集を含む)

司会 西尾 榮
柳会の辞 若本多久志
挨拶 中島生々庵 川村 好郎

兼題「大笑い」 河内 天笑選
「顧客」 正本 水客選
「好評」 八木 千代選
「素通り」 川村 好郎選
「三枚目」 山本 素郎選
「遊ぶ」 臼井 三林坊選 高杉 鬼遊選

席題 三題(当日発表)
選者 野田素身郎、谷井扇水、本田恵二朗。兼席題三句以内、午後二時締切
菊沢小松園

閉会の辞
ベストテンご招待懇親宴
ベストテンの方は百円封入(句集代を含む)各題別々に柳箋または便箋に記載の上二月十八日までに左記宛送って下さい。

大阪府高石市高師浜三丁目五十一番六
郵便番号 五九二 川村 好郎
主催 大萬川柳会
後援 川柳塔社 割烹 大萬

明けましておめでとうございます

季節料理・折詰



大阪市阿倍野区松崎町
TEL (623) 5031・5032
南区豊屋町三ツ寺センター
TEL (211) 9184

川柳家の暦

(一月生まれの人)

「川柳家の暦」は故白柳さんが数年間この取材に走りまわった労作である。十二月分までノートに書かれてあるのが順を追って発表していくが、句は白柳さんが選んだもので作家の代表句という意味ではない。

(編集部)

遺稿 清水白柳

- | | | | | | |
|-----|--------------------|-----|-----|-------------------|-----|
| 1日 | 若林草右 M29 丙申 | 西宮 | 2日 | 谷垣史好 T14 乙丑 | 松原 |
| | 我が道を行く蛭螻の白いあと | | | 偶然へ歴史は意味をつけたがり | |
| 1日 | 伊古田 伊太古 M31 戊戌 | 東京 | 2日 | 泉比呂史 S7 壬申 | 姫路 |
| | ちちはははあれどふるさととしては無し | | | 水枕干して子供とはしゃぐなり | |
| 1日 | 小松 令 M34 辛丑 | 高知 | 3日 | 横山青果 M37 甲辰 | 高知 |
| | ONの打順スタンド湧いている | | | 適量に飲む酒妻が居てくれる | |
| 1日 | 市場 カネ女 M39 丙午 | 大阪 | 3日 | 明石柳次 M41 戊申 | 京都 |
| | 働く喜び針だけが知ってくれ | | | 人生に台本はなし朝の靴 | |
| 1日 | 山本 規一郎 T4 乙卯 | 京都 | 3日 | 定金冬二 T3 甲寅 | 富田林 |
| | 寒襖古親子で汗の良い家庭 | | | ある時は王者の心花を買う | |
| 1日 | 木田 雅司 T7 戊午 | 神戸 | 4日 | 江城 修史 T7 戊午 | 大阪 |
| | 子だけは饒舌となる日を過し | | | 廻転椅子が友との距離を遠くする | |
| 1日 | 斎藤 正一 T9 庚申 | 福山 | 4日 | 宮本 時彦 T9 庚申 | 高知 |
| | どうしても飛ばねばならぬ巣に生れ | | | 長男がひとり故郷へしがみつ | |
| 1日 | 竹崎 恭平 T11 壬戌 | 高知 | 5日 | 山添 眉水 M34 辛丑 | 大阪 |
| | 子の短所妻へはねかけはね返り | | | そっと手を入れた乳房がつかしい | |
| 1日 | 田淵 千代子 T12 癸亥 | 神戸 | 5日 | 戸田 古方 M38 乙巳 | 豊中 |
| | 牛乳をぬすまれ春眠たのしめず | | | 静や静 頼朝の眼と政子の眼 | |
| 2日 | 傍島 静馬 M33 庚子 | 高槻 | 5日 | 山田 菊人 M42 己酉 | 大阪 |
| | 名子役小学校に行きたがり | | | 紋付の似合う背中が遠ざかり | |
| 2日 | 今西 章雅 M40 丁未 | 大阪 | 5日 | 森田 布堂 T8 己未 | 鳥取 |
| | 病状六尺子規情熱を不朽にす | | | 身よりのなき老婆いくさのことにふれ | |
| 5日 | 森田 布堂 T8 己未 | 鳥取 | 5日 | 白石 潔 T9 庚申 | 大阪 |
| | | | | たまたまの暇を売れっ子もてあまし | |
| 6日 | 大野 風柳 S3 戊辰 | 新潟 | 6日 | 幻影の錯誤今宵も雨となり | |
| | | | | 点と線春の家計を駈けめぐる | |
| 7日 | 西森 青雨 M45 壬子 | 高知 | 7日 | 江口 泉湯 T15 丙寅 | 高知 |
| | どう見ても川とは寝にくい子の寝顔 | | | 日本の娘に返す晴姿 | |
| 8日 | 津秋 六花 M43 庚戌 | 山口 | 8日 | 長谷 佳宝 T2 癸丑 | 東京 |
| | | | | 情は善なり悪友に金がない | |
| 9日 | 築山 快夢起 M23 庚寅 | ハワイ | 9日 | 松浦 寿々奈 M39 丙午 | 三重 |
| | | | | この家のくらしにふれる聴診器 | |
| 10日 | 林 宏子 M45 壬子 | 大阪 | 10日 | 高橋 月南 M20 丁亥 | 神戸 |
| | | | | 幸福は今日も朝から響がけ | |
| 11日 | 森 脇 由香里 M41 戊申 | スイス | 11日 | 竹内 花代子 T8 己未 | 高槻 |
| | | | | 瞳を閉じて夫の恋を責めず置く | |
| 11日 | 橋本 S6 辛未 | 津山 | 11日 | 西宮 すなお S7 壬申 | 西宮 |
| | | | | スイッチを切っても天皇は消えない | |
| 12日 | 岸本 木魚 M42 己酉 | 橋本 | 12日 | 家中の溜息母のひとりする | |
| | | | | | |
| 13日 | 前田 義風 M45 壬子 | 石川 | | | |

★柳 界 展 望

橋高薫風担当

写真は南区医師会秋のレク、京都鞍馬山で左から若子、生々庵主幹、葉子、一三天、河野諸氏



▼麻生路郎七回忌追悼川柳大会は別項の通り盛大に開催することになりましたので各地から多数のご参加をお願い申し上げます。▼麻生葎乃先生から故白柳氏の追悼句を二月号に送るといっておたよりをいただいた。ご健在である。

▼石原青竜刀氏（東京都）から生々庵主幹に「十二月号巻頭の貴文は小生に貴重なニュースとしてありがたく拝読しました。中略」この位の風刺は当然すぎる川柳の使命でさえある」という言葉には我意を得たりと快哉を叫びました。

▼小西無鬼氏（本社参事）

は昨年十月から本年一月まで、月一回興立丹波文化会館主催老人大学の趣味講座に川柳を担当、川柳普及に尽力をされている。

▼岡村久志良氏（本社参事）

は公職を指に余る劇務や健康上から「まずかつこの百花集選者を菅野竜児氏と交代。なおご母堂が八十五歳の天寿を全うされ十二月一日に逝去された。

▼池田あや子さん（岡山同人）から生々庵主幹に見事な川柳影のお盆が贈られてきた。夫君太郎氏の句「円

満の陰に女が一人泣く」主幹の天位選が彫られてある。▼西尾菜氏（副理事長）は十一月の文化の日に産業功労者としての八尾市長から表彰を受け、また、八尾商工会議所創立以来二十年間役員議員として尽力した功により、大阪府知事から表彰状を受けられた。

▼清水白柳追悼句会は十二月十三日午後一時からの堺万福寺で開催。清い（好郎選）、水（小松園選）、白（摩太郎選）、柳（柳太選）、子（青香選）の兼題に取り組み故人を偲んだ。堺川柳会、富柳会、若芽川柳会共催。

▼清水白柳追悼句会は、十二月二日和歌山七面短詩クラブ（生々庵主幹出席）を皮切りに、十日は玉造川柳会、二十日は南大阪川柳会の主催でそれぞれ開催。故人の生前を偲んだ。清水白柳追悼句会は昭和四十六年一月二十四日（日）午後五時から、尼崎労働会館三階中ホール（阪神電鉄尼崎駅下車北へ二百米）で開催。

兼題は梅（西尾菜選）、列（田中秀果選）、脱ぐ（増井不二也選）、ポケット（青木三碧選）、白（岡橋宣

介選）、席題三題当日発表各題三句、締切り午後六時半、投句は二百円封入の上一月二十日までに伊丹市昆陽字流二五の一七海士天樹宛。主催は関川柳懇話会。

▼第二十一回新年交歓三十六題川柳大会は、昭和四十六年一月十日午前十時から広島市幟町共済会館五階で開催。兼題は猪・夢・盃・墨・先・膝・嘘・鼻・艶・名前・公害・無理・海外・通路・冒險・一枚・酒豪・冗談・好評・雑音・打つ・走る・揃う・片手間・割切る・リズム・図書館・チャ

ンス・一人相撲・つまづく・おせっかい・女の一生、各題二句。会費三百円。主催広島川柳会。後援毎日新聞広島支局。

▼渡辺尺雙著「井上剣花坊伝」が東京都杉並区和田丁目五九の五、柳樽寺川柳会から発行になった。川柳中興の祖、井上剣花坊生誕B6版二百頁、定価五百円、送料五十円。

▼大陸川柳作家同窓会は、昭和四十六年七月三、四、五日に北陸方面で第七回を開催。詳細は次号。

▼川柳道場は水粉千翁氏(倉敷市同人)を中心とし、麿を重ねて来られたが、この程百号を刊行することに決めたので、オール選者共選の兼題「明日」、その他選者諸氏への「川柳への提言」掲載などの企画を推進しておられる。

▼川柳「わかまつ」(小松市)第一巻第五号の十一月号はこまつ柳壇・川柳塔同人交歓句会抄として発行された。(原稿や写真が本社宛にこまつ詳細の発表ができなかった)句会抄には千太郎芳朗、きみ子、鬼遊、雀踊子、摩天郎、茶仏、味平、葉諸氏の佳句が光る。

▼川柳平安誌の福永清造氏担当の柳風録は、十二月号を以て終り、新年からは「かれんとこおなあ」が復活する。

▼豊岡川柳天守閣五周年記念句会は十一月十四日(土)豊岡市瀬戸公民館で開催。本社同人の羽原静歩氏(守

口市)が出席された。

▼川柳やまぐち百三十号は新南陽市市制記念川柳大会作品集を並載、当日百名を上回る参加者があり、そのうちの六十名強が女性であった。十一月十日発行。

▼第七回北上市民芸術祭川柳は十一月二十三日午前十時から北上市立図書館で開催。

▼三重川柳協会の役員が新年から体制を換え、足守岸志ん児、顧問・中川黎明庵、野村可通、喜田子楽(會計兼任)、副主幹・谷間流橋本征一、編集局・津市柳山津興一、二九九山岸志ん児方、事務局・津市丸之内緑町二〇六二喜田子楽方、婦人部長・楠木志奈子、副部長・宮崎幹江。

▼米沢暁明氏(大洲市)は十一月二十二日公務で長崎へ。「おちこちに異国情緒も眼鏡橋」

▼浜野奇童氏(岡山県同人)

は公務に追われて作句もままならず、雑誌が来るたびに句のない淋しさをかみしめておられるが、今度、日本文芸出版から「岡山の川柳」と題する小冊子発刊の企画があり、弓削川柳社に編集依頼があったので、片山巷雨会長をはじめ、長谷川紫光、山田止水、直原七面山氏らと計って鋭意進捗中である由。

▼第五回岡山県川柳大会は一月十日午前九時から邑久町公民館ホールで開催。兼題は「裏・祈る・距離・母・未練・明日・登る・各三句。選者は久米雄・俊平・三林坊・巷雨・久志良・よしえ・一也。知事杯受賞選考委員は風来子・忠美・弓削平・恵二朗・万古・好啓・三葉・あや子・投句は百円封入一月七日までに岡山県邑久郡邑久町真徳、嘉数千代香宛へ。

▼池田あや子さん(岡山同人)は岡山市文化祭で市教育長賞を受賞。なめらかな舌よ火薬がふと匂い。

▼川柳わかやま十一月例会へ西尾榮氏と金泉萬楽氏(番傘)が出席。出席者互選で「指切りへ女の真顔怖くなり」で南出陽一氏が和

歌山市長杯を獲得。

▼川柳短冊展が唐津市で十一月二十二日に開催。新岡回天子氏(唐津同人)が主宰する虹川柳倶楽部が後援とあって、本社から幹以下幹部が作品を提供して盛会だった。

和。

▼南大阪川柳会は一月十九日午後六時。題は「スター・勢い・気長・家族連れ・会場は松崎町二丁目以和貴荘。

▼南海川柳会は一月二十一日開催。題は「新車・握手・嘘・会場は親和クラブ。

▼玉造川柳会は十二月の白柳氏追悼句会をもってピリオドを打たれた。

阿万万的・松川杜の共著

発行所

川柳塔社

一月中旬発行
送料共 四百円

句集「的」

発行所

川柳塔社

一月中旬発行
送料共 四百円

贈る味の灘一



金露

清酒 キンロ

故白柳氏をしのびながら

本社十二月句会

一会場 以和貴荘

十二月七日・午後六時

故白柳氏の追悼句会のように、心なしかい
つものように笑い声もあり立たない。
若本多久志副理事長の柳話も白柳氏の思
い出などからはいっている。

柳話は国語の乱れから文字の使い方など有
益な内容だったがスペースがなく割愛する。
各選者には二分間だけ白柳氏について語って
いただいた。これも会場の関係でやむ得なか
った。

十二月句会の月間賞杯は小浜牧人氏。

出席：花梢・美房・与呂志・双楽・文秋・
一舟・喜風・一三夫・新之助・柳宏子・トメ
子・滋雀・吸江・天笑・圭井堂・好郎・誓二
・静馬・葛城・柳志・迷朗・醉々・万的・千
子・肖二・美代・小路・古方・鶴声・維久
子・勝晴・天樹・綾女・杜的・形水・茂美・
儀一・二三・つき子・鶴翠・太茂津・生々
庵・葵水・千寿子・凡九郎・一治・多久志・
宣介・栞・金三・凡吉・頂留子・牧人・薫風
・小松園・庸佑・恒明・鬼遊・幸雄・修史・
あいき・静歩・季賛・葉子。

席題「ゴーゴ」 海士天樹選

ゴーゴへ昼の不満が跳ねている 滋雀
本能のままにゴーゴ身をよじる 天笑
ゴーゴだけ覚えて家出から戻り 小松園
ゴーゴに神様外へ出たくなり 維久子

ゴーゴをすする娘に見えぬ訪問着
若者の悩みゴーゴ振り落とす
ゴーゴへ踊る宗教から賛辞
ゴーゴへかざらぬきに出る舞妓
ゴーゴを岡本太郎はバカかい
ゴーゴと共産党が大嫌いな
頃合いか二人ゴーゴから消える
ゴーゴを踊って別れがつかない夜
一べんでももうゴーゴはあきらめる
綻びを縫う母ゴーゴとは知らず
ゴーゴのはげしき口笛追いつかず
どうしても父ゴーゴになれず
ゴーゴのリズムの外に置き去られ
ゴーゴも縁なししっかり定時制
ゴーゴの女獣の声を上げ
ゴーゴを踊り反米派に属す
捕われた時ゴーゴを踊ってた
青天のへきれきゴーゴ等を妻
ゴーゴになるキャンプの火燃と燃
ゴーゴにの疲れて消えていた邪心
ゴーゴに不倫のかげが見当らず

席題「試食」 古川鶴声選

試食した物明かされたしかめ面
すき腹が試食の列へまた入り
買う気などさらさらないが試食する
試食会先輩通りに箸を取り
試食したばかりに山買わされる
試食してネタへきびしい随筆家
味見した義理で包ます百グラム
マニキュアの手が染まりも試食会
お車代渡して試食しても出来
すずめられ試食売り子に義理が出来
試食分だけをハカリ知っていた
チクロなど入ってませんと試食品
ご試食のご意見などとしゃべらされ

文女秋
綾三馬
静馬
勝久
多志
小路
金明
恒江
吸三
万佑
庸宏
迷朗
形水
美房
小松園
万路
天文
樹秋

気のせいか腹が痛んで来た試食
試食して点数の辛い栄養士
試食とは知らずお初とすめられ
内心は箸がびくびく試食会
ゴキブリが試食している台所
ふく鍋へ試食の箸をゆずり合い
デザート試食の菓子へ子沢山
試食品サクカもつともそうに聞き
試食品招ねかぬ人もやって来る

席題「札束」 小浜牧人選

パチンコ屋今日の稼ぎを束にする
札束に弱味見られる十二月
札束具に心を札束をこしらえる
札束へ悪心こらえきれず
札束の前へ男は意地を捨て
札束の乱舞へシングルベルが派手
裏の裏まで札束はきいていた
札束を掴んでからの仲間割れ
札束を持って鼻唄湧いてくる
シングルベル札束じつとして呉れず
約手今日落とす札束とはあわれ
札束は銀行で見て人のもの
当選へとんだ札束見逃がさず
持ちなれぬ札束睡眠不足し
あるとこにあつて札束荷物めき
札束を抱いたお客が気味悪い
札束に志操堅固があやしむ
薄べらな札束これで百万か
札束に縁なく人間文化財
札束で割り切る恋にされた
札束がたらないままで除夜の鐘
札束が下げる頭は苦にならず
札束はご機嫌さん来てくれず
札束を積んでも癒えぬ破目となり

恒誓二
柳宏子
静馬
柳志
萬三夫
鶴声
小水
形方
古明
恒水
形水
一三夫
千房
美茂津
頂留子
迷朗
好郎
庸佑
恒明
生々庵
静馬
生々庵
鶴声
柳宏子
喜風路

マスコミが白羽へ飛んだトップ記事
 栄転の白羽的へ身をさらす
 外遊へ白羽を立てた社内報
 お見合に母の白羽も無駄となり
 紅一点男まさりにもきた白羽
 白羽の矢大人になった娘と気付き
 弦を離れた白羽引返しもならず
 白羽の矢皆が鎮く人に立ち
 ドラフトで当てた白羽の矢がはずれ
 白羽の矢向けた娘は予約済み
 白羽の矢静かに派閥動き出す
 球団の白羽進学曲げにくる
 裏金のききあって白羽の矢が外れ
 ためらいがなくて白羽の七光り
 白羽の矢当たるも親の七光り
 下積みが無駄でなかった白羽の矢

金三 鬼遊 静歩 喜風 花庵 生つき 小松園 小メ子 文路 文秋 庸水 葵佑 庸秋 文舟 恒明



中野のゴールドゴンブ

NAKANO'S
 ゴールドゴンブ
 日本のチェーイングム
 GOLD HONGU

中野物産株式会社

本社 工場 大阪府堺市大浜中町1-6 TEL.0722-41-9105
 東京支店 東京都中央区銀座2-11-9 TEL.03-426-3700
 名古屋支店 名古屋市中区六軒町2-1 TEL.052-371-0654
 福岡支店 福岡市上区東2-9-1 TEL.092-35-1411

まっすぐに生きて白羽の矢に射られ
 白羽の矢立って社宅の騒がしさ

兼題「推理」 西尾

考古学者の推理 適中出土品
 身勝手な推理で噂撒きちらす
 推理マニア妻の寝顔にもつ疑惑
 推理ぐせととうとう頭おかしなり
 ごみだめのメモが推理を覆えす
 みずからの推理に女もえてい
 推理めく話上手の瞳が笑う
 焦点を追って推理の回り道
 やんごとなき方へも推理逞ましい
 結局は現実となりあわて出し
 推理小説乗り越しでもまだ解けず
 推理した予感びたりとはずれたり
 キャバレーで推理作家が得たヒント

天樹 柳志 菜蓮 幸雅 章雄 静馬 野路 野迷 葵水 千万子 圭井堂 醉佑 醉江 吸吉 肖二

推理する地獄意外に楽しらし
 結着を急ぎ推理を無理につけ
 帰納法でこんどは解けてくる推理
 推理する読者の裏をかく作者
 ここからが推理ですと言う仕組
 言い訳も推理通りの夫なり
 推理通りになってやる気の家出
 言葉尻推理されたる電話口
 素人の推理に負けたら捜査陣
 結局は笑いで落ちになる推理
 以下次号まで核心に触れて来ず
 読者の推理にさからうように書き
 そんな事何が推理はじまった
 サヨナラしてから推理はじまった
 推理から発明を生む科学陣
 ベテランの推理コツコツ歩いて
 犯人は左きつちよという推理

喜杜 古留 季留 好郎 新之助 柳志 小形路 葛城 庸佑 凡九郎 双天 牧笑 菜人

本社新春句会

日時 一月七日(木) 午後六時
 会場 以和貴荘(いわきそう)

★短冊交換会(一人三点以内)
 ★四十五年度月間賞杯授与と全出席者表彰

柳話
 「リズム」
 「群衆」
 「年輪」
 「家」

中島生々庵 川村好郎 西尾菜選 若本多志 若本多志 中島生々庵

阿倍野区松崎町二丁目
 電話 622-1275 番

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
 大阪市南区鍛谷仲之町20

川柳塔社

2月の兼題 「清水」「ベレー帽」「世話好き」

各地柳壇

▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

こまつ柳壇

山上千太郎報

当てにせぬ返事に人生表むく千太郎
二次会に二つ返事でついでゆき茶
いい返事受話器をみなどでとり囲み草
障子開けて返事と似つかぬ顔が出るき
農協の旅につまずく靴をはく雀踊子
時刻表片手に馴れたひとり旅芳
絵はがきの歩いた順にハネムーン朗
旅帰えり一軒忘れて来た土産一二三
俄降り駅でとまどう一人旅なほ江
絵はがきの短信旅の無事を知る松
酒と女社用旅の旅日記たつ路
いとし子よ冥土の旅は暗からう吉
いつの間にか又お土産の嵩が増えさ
いかめしい名刺言葉はのどの奥富美子
代議士の名刺の裏が無理を云う弘
いつぞやの名刺抽斗みんな開け柳
いだいだ名刺が膳の上で酔い柳
川柳塔まつえ句会 祥月報
幾つかの恋を咲かせた海も暮れ文
茶も用意自慢の菊を見せたがり泉
倅せな日々に病の頃おもい越
冷房の夜汽車クシャミも二つ三つ花
灯を消した甘さへふつとよぎる影千代

設計図僅かな坪に欲があり
里親の悩み雀へ呼びかける
雨女成は火葬になる朝も
経済成長した日本の公害禍
物みんなくべきとこへ置いて無事
骨までもしゃぶるか公害しのびよる
コスモスのようでミニがよく似合
余生無事處と名のつくに似合
ろうたけしあけびに山の過疎をみる
六十万が見た幻の未来都市
感謝する上司よ部下だつて人間です
感謝する心を抱いて朝を出る
ウイロー社(ハワイ) 林 明春報

子をあやす父親の顔漫画めき 北海
漫画本備えて床屋繁昌し 公女
漫画調に生きて一族恙なし 峯円
一国の元首も漫画種となり カロ女
子の漫画なに悟ったか酒を断ち 泉山
漫画から旧師の紳名思ひだし 蒼花楼
パパの顔漫画にかいて叱られる 快夢起
大統領日々を漫画の顔になり 浮花麗
ニクソンも漫画だけには手が出せず 浮草
備前川柳社 目賀芳月報
投票紙手ひら返したのを知られ 秋月
目で知らせ手にはふれないまま別れ 伊久野
手の甲へ乗せてす早く味をきき 柳子
左手に優勝カップ握手する 鮎子
手のこんだ料理のわり頼はおち 白黒
へんこつをあの手この手で頼んで来 清春
陣痛が届かぬあなたの手を求め 芳明
手を出せば幼児しばらく顔を見る 佐加恵
思ひ出は不骨な父の手の温み 胡風
州

色紙短冊
書画用品

大坂おしあ
丹ま月堂上
ちゆまにんこに

参観日うちの子だけが手をあげず
いたわりの手を肩にして泣きつづけ
手のとどく処に柿の見当らず
スリの手も名工の手も五本
手のぬくみ残して汽車の発車ベル
手の内を知られたくない日の秘策
ホステスは握手もサーブಿಸ料に入れ
メス握る医者へ心の手を合せ
秋の月ながめて手酌の手の想い
あか切れの手で新年の鏡餅
また句碑の謂を話す下駄をはき
川柳たましま 水粉千流報

惜しそうちに捨てたたばこを踏みんり
済みません右ネジと思ひましたんや
トンボの目くるりまわった茄子の色
すいすいととんでトンボに壁が無い

成林隆流
行鶴三翁
久米雄
幸仙郎
宗郎
万子
浄美
芳月
草二
明良
一良
声

大会 柳川忌七回 郎路生麻

日時 昭和46年7月11日(日) 午後1時開場

会場 御堂会館(南御堂)

—電話二五一・五八二〇番

大阪市東区北久太郎町四一六八

(地下鉄本町駅南出口から南へ二百米)

司会

西尾 葉

開会の辞

若本 多久志

挨拶

中島 生々庵

同 故麻生路郎先生七回忌法要

麻生 葭乃

講演

堀口 塊人

兼題と選者

〔麻〕

福永 清造

〔生〕

増井 不二也

〔路〕

三条 東洋樹

〔幸〕

岡橋 宣介

〔七〕

近江 砂人

〔塔〕

中島 生々庵

(各題三句以内・席題はありません)

閉会の辞

川村 好郎

会費

三百円。(記念品贈呈)

懇ふ会

千円。会場内食堂で懇親宴。

大阪市南区鰻谷仲之町二〇

主催 川柳塔社

初詣

住吉大社

住吉公園駅(急行臨時)下車すぐ——90円
1日~3日.....新年特別奉納「住吉踊」

水間観音

貝塚駅のりかえ水間駅下車すぐ——420円
2日・3日千本搦と利生の銭入り開運餅まき

高野山

高野山駅下車バス.....60円
1日~3日 長寿箸特別授与<奥の院燈籠堂>
<運賃はいずれもなんばからの往復>

お問合わせ
南海交通社

南海電車



しあわせまねく
南海沿線

ペンペン草

★あけまして おめでとー

ごさび。本年もよりしくご指導たまわりますように。

★故白柳氏の追悼号が次号になった。急逝当時はずで

に十二月号は編集済みだつたし、新年号にはどうかと

も考え、けつきよく二月号へ持ち越しになったことを

おことわり申しあげておく

★白柳さんの遺稿を散逸しないように遺族の方に頼ん

でおいた。これは一片たりともムダにしないつもりで

いる。★「旅人」以後の麻生路郎作品は当分ボクが受け継いでやっていく。いづれとな

たかに助けてもらわねばならないだろう。

★故福田山雨楼氏はよく調

らべものをされた。白柳さん

もその意味では山雨楼氏と共通したも

を持っておられたようである。惜しい人

をうしなつたものである

しかに衝撃をうけた。有島武郎氏とその愛人波多野秋子さんと

のころは多感な少年時代だ

った。芥川竜之介氏(昭和2年)や太宰治氏(昭和2年)

のときは別にどうということとはな

なかつた。★三島事件の週刊誌を片

ぱしから読んだが、ボクは

やっぱり立派だと思つた。百年に一人

より出ない傑物だと思つた。

★新年号だというのにシメ

キモノと私

▼新調を着る女ごころは男の方にはわかつていた

だけないかも知れませんが、着付けにも流行があ

つてよくデパートまわりをします。

▼衿ぐりはこぶし一と握り

はいるぐらにします。が、あまりくり過ぎると

ヌシシの年だが、易断の本

ツボク

には亥年生まれの人

は意志強く、独立の気概に富み、百折

不撓のことに当たる、それだけに苦勞も

多いとある。これを川柳塔にあてはめ、

手にツバしてファイトを

ましたことである。

★麻生霞乃先生はご健康である。

★同人吟の自選は本号をもつて中止することになり

ました。

三月号発表 (1月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島 生々庵 選

近作柳樽 (10句) 北川 春巢 選

課題吟 (各題5句以内)

「ビニール」 宮口 笛生 選

「理想」 松川 杜的 選

「美談」 池田 古心 選

四月号発表 (2月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島 生々庵 選

近作柳樽 (10句) 川村 好郎 選

課題吟 (各題5句以内)

「入社」 垂井 葵水 選

「本気」 川口 弘生 選

「酔客」 福田 丁路 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

★川柳塔の投句は本社同人に限ります。★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

次号は清水白柳追悼号

定価 百八十円 (送料六円)

半年分 千 百 円 (送料 共)

一年分 二千百六十円 (送料 共)

昭和四十五年十二月二十五日印刷

昭和四十六年一月一日発行

大阪市南区鯉谷仲之町二〇番地

編集兼 発行人 中島 蓬太 郎

印刷所 大陽印刷株式会社

郵便番号 五四二

大阪市南区鯉谷仲之町二〇番地

発行所 川柳塔社

電話大阪・二七一一三九八五番

振替口座 大阪・三三三六八番

料理も電話も

551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

豚饅 蓬策 焼売

大阪 なんば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心齋橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストアー

セドリック
ローレル
ブルバード

乗用車専門販売店

尼崎日産自動車株式会社

代表取締役 若 本 真 彦

本社	尼崎市尾浜町2丁目3番27号	TEL大阪(429)5861(大代表)
尼崎営業所	尼崎市尾浜町2丁目3番27号	TEL大阪(429)5861(大代)
宝塚営業所	宝塚市旭町3丁目2番6号	TEL宝塚(87)2626~8
西宮営業所	西宮市下大市東町11	TEL西宮(52)1121(代)
神戸営業所	神戸市長田区2番丁4の2の1	TEL神戸(56)6725(代)
明石営業所	明石市船上視町2の1の10	TEL明石(913)0234
篠山営業所	兵庫県多紀郡丹南町牛ヶ瀬字尾ノ谷29	TEL丹南局399
姫路営業所	姫路市御国野町国分寺56	TEL姫路(52)4181(代)
三田営業所	三田市字新土1610の1	TEL三田(07956)6501~3
加古川営業所	加古川市平岡町高畑字血池537の1	TEL加古川(23)3144

'71 幸せをご予約ください

お伊勢さん初詣

神宮から“初幸の亥”が授かる（先着17万名様）

初詣記念割引乗車券発売中

近鉄なんばから1,140円 京都から1,220円
このほか近鉄各駅と近畿日本ツーリスト・日本交通公社・日本旅行で発売（いずれも伊勢市・宇治山田・五十鈴川駅(内宮前)往復）

初詣特急券ただいま発売中

伊勢市・宇治山田駅へ…近鉄なんばから
1時間45分 特急券片道250円 京都
から2時間14分 特急券片道300円
（五十鈴川駅へはいずれも50円増）

近鉄

近鉄特急券のお求めに近鉄主要駅と近畿日本ツーリスト・日本交通公社・日本旅行でお早めに



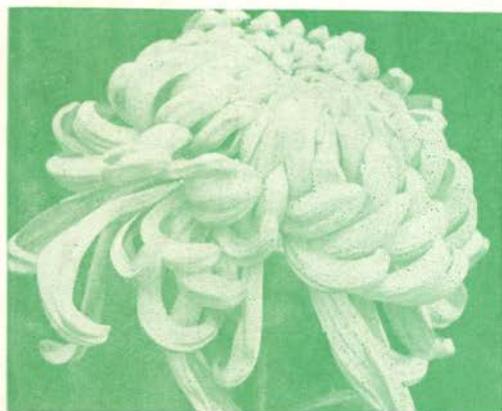
一番よい酒

うまい酒

清酒

菊正宗

宮内庁御用達
菊正宗酒造株式会社
神戸・灘・御影



昭和四十一年十一月二十五日発行
昭和四十六年十一月二十五日発行
昭和五十一年十一月二十五日発行
昭和五十六年十一月二十五日発行
第三種郵便物認可

刊柳塔 一月号

定価 百八十円（送料大別）